始

毛利式

日本速記術

毛利高範著

323
435

323-435

毛利式

日本速記術

毛利高範著

大正
11. 8. 7
内交

東京柏木
毛利式速記研究所

注　意

「一部の改良」及ひ「正誤」は卷末に掲けてあります

序

日本速記法發表の後，省略法の一部に改良を加へて，修訂日本速記法を發行したが，其完成を計るため，玆に日本速記術を著はしたのである。

法では其法則を說き，術では其運用を述べるので，委しくいへば，法は何故との問に答へ，術は如何に應用するかを敎へるのである。さうして法術共に簡明で，何人も容易に利用し得られるのである。

本書は速記專門家たるを望む人，又は斯術を利用して自己の著作，筆記等に便益を得やうとする人のために，獨習用として編述し，百

十課で全科を修了せしめる仕組であるが，讀方と書方との二部を掲げ，例題を豐富にして，容易に習得されるやうにしてあるから，順序をふんで徐に練習したならば，必ず好成績をあげる事と確信するのである。

大正十年七月

著者識

目次

第一部

初等速記術

第一編　速記文字編…1—27
第一章　諸般の心得……1
第二章　速記文字……5
第一課　母韻……6
第二課　か行……7
第三課　さ行……8
第四課　た行……9
第五課　な行……10
第六課　は行……11
第七課　ま行……12
第八課　や行……13
第九課　ら行……14

第十課　わ行……15
第十一課　ば行……16
第十二課　が行……16
第十三課　ざ行……17
第十四課　だ行……18
第十五課　ば行……19
第十六課　きゃ行……19
第十七課　ぎゃ行……20
第十八課　しゃ行……21
第十九課　じゃ行……21
第二十課　ちゃ行……22
第二十一課　にゃ行……23
第二十二課　りゃ行……23
第二十三課　ひゃ行……24
第二十四課　ぴゃ行……25
第二十五課　びゃ行……26
第二十六課　みゃ行……26
第二編　速記文字連綴篇……28—59
第三章　假名遣……28

第四章　一階文字相互の連綴…29
第二十七課　い段とえ段……29
第二十八課　いえ兩段とう段……31
第二十九課　う段といえ段……32
第三十課　う段とう段……33
第五章　二階文字相互の連綴…34
第三十一課　あ段とあ段……34
第三十二課　あ段とお段……35
第三十三課　お段とあ段……36
第三十四課　お段とお段……37
第六章　一階二階字相互の連綴……38
第三十五課　あ段といえう段……38
第三十六課　いえ段とあお段……39
第三十七課　お段といえう段……40
第三十八課　う段とあお段……41
第七章　母韻の連綴……42
第三十九課　母韻相互の連綴……42
第四十課　母韻と一階文字……43
第四十一課　母韻と二階文字……44

第八章　ら行の連綴……45
第四十二課　母韻とら行……45
第四十三課　一階文字とら行……46
第四十四課　二階文字とら行……46
第九章　鼻聲促聲長音の書方…47
第四十五課　一階字長音(母韻)の連綴……48
第四十六課　二階字長音(母韻)の連綴……50
第四十七課　一階字長音と二階字長音…50
第十章　疊字……51
第四十八課　輕音疊字……52
第四十九課　重音疊字……53
第五十課　疊字の特別法……54
第十一章　綴字の例……56

第二部

高等速記術

第三編　省略編……60—133
第十二章　略韻法……61
第一節　獨立略韻法……61

第五十一課　獨立字の略韻……61
第二節　終音略韻法……63
第五十二課　い韻略法……63
第五十三課　あえ韻略法……64
第五十四課　うお韻略法……65
第十三章　略音法……66
第三節　二音語略法……67
第一　か行屬略法……67
第五十五課　か行上段の略法……69
第五十六課　か行中段の略法……70
第五十七課　か行下段の略法……71
第五十八課　か行拗音の略法……72
第二　は行屬略法……73
第五十九課　は行と其拗音との略法……73
第三　や行略法……74
第六十課　や行の略法……74
第四　た行屬略法……75
第六十一課　た行中段の略法……75
第六十二課　た行上段の略法……76
第六十三課　た行下段の略法……76

第六十四課　た行拗音の略法……77
第五　さ行屬略法……78
第六十五課　さ行上段の略法……78
第六十六課　さ行中段の略法……79
第六十七課　さ行下段の略法……80
第六十八課　さ行拗音の略法……80
第六　ら行屬略法……81
第六十九課　ら行上段の略法……81
第七十課　ら行中段の略法……82
第七十一課　ら行下段の略法……82
第七十二課　ら行拗音の略法……83
第七　な行屬略法……83
第七十三課　な行上段の略法……84
第七十四課　な行中段の略法……84
第七十五課　な行下段の略法……85
第七十六課　な行拗音の略法……85
第八　ま行屬略法……86
第七十七課　ま行上段の略法……86
第七十八課　ま行中段の略法……87
第七十九課　ま行下段の略法……87

第八十課　ま行拗音の略法……88
第九　ば行屬略法……88
第八十一課　ば行上段の略法……89
第八十二課　ば行中段の略法……89
第八十三課　ば行下段の略法……90
第八十四課　ば行拗音の略法……91
第十　わ行略法……91
第八十五課　わ行の略法……92
第四節　三音語略法……93
第八十六課　三音語特別略法……94
第八十七課　三音語略法の甲式……95
第八十八課　三音語略法の乙式……96
第八十九課　三音語略法の丙式……97
第五節　四音語略法……98
第九十課　四音語略法の甲式……99
第九十一課　四音語略法の乙式……99
第九十二課　四音語略法の丙式……100
第九十三課　四音語略法の丁式……101
第六節　五音語略法……102
第九十四課　五音語略法の甲式……102

第九十五課　五音語略法の乙式……103
第九十六課　五音語略法の丙式……104
第九十七課　五音語略法の丁式……104
第九十八課　六音語七音語の略法……105
第十四章　特別略法……106
第九十九課　ます,ませぬの略法……107
第百課　ますの變化……107
第百一課　ませぬの變化……108
第百二課　ましたの變化……110
第百三課　られ,らるの變化……111
第百四課　前課の續……112
第百五課　其他の略法……114
第百六課　する,せずの略法……115
第百七課　する,せずの應用略法……116
第十五章　數字……118
第百八課　數位の書方……118
第十六章　自由略法……119
第百九課　自由略法……121
第百十課　自由略法の續……123
第十七章　速記の例……125

第一部

初等速記術

第一編

速記文字編

第一章

諸般の心得

1. 術といふ以上，相當の練習を要するのは無論で，決して一足飛に上手になれるものではない。百里の道を歩くのも，一歩一歩の連續であるから，出來るだけ冷靜の態度で，徐々と練習するの覺悟が肝要である。

2. 幾何的の速記は入易くて得難く，文字的のは入難くて得易いといふのが定論であるが，何處が入難いかといふと，其字形が幾何的のよりも書きにくゝ見えるからである。併し覺込んでしまへば，幾何的のよりも早く書

けるが，最初はむづかしく感ずるのである。本書の第二十六課までが，卽ち入難い部分であるから，これを十分に習つておかぬと，さきに進んでも思ふやうに筆が運ばぬ。此第二章は興味の甚だ少ないものであるけれど，其熟否は成功するか，しないかの分岐點となるのである，何故かといふに此式では，器械的暗記の必要はなく，第二章の筆力で全科を押通して行くので，これに習熟すれば此式の三分の一を修了した譯であるから，第二章に對しては深甚の注意を望むのである。

3. 初等速記の課程には，書方と讀方とを對照して揭げてあるから，先づ書方を見ないで讀方を學び，それから讀方を見ないで書方を，速記文字で練習するのである。

4. 速記文字に濃淡の二種がある。淡いのは出來るだけ細く書き，濃いのは夫より少し力をいれるまでゝ，これがために運筆を鈍らすやうな書方をしてはならぬ。

5. 速記文字を練習するには，字形のくづ

れぬやうに注意して，決して早く書かうと思つてはならぬ。練習を積むに從つて自然と早くなつてくる。自然に早くなつたのでなければ，本當の早さとはいはれないのである。少しでもあせると字がくづれるから，正確に書く習慣をつけるがよい。

6. 速記文字で書いたものは，必ず讀んで能く目に馴らし，普通文字を讀むやうに早くならねばならぬ。字の讀みにくいのは書方の惡い證據だから，幾度も書き直して練習する必要がある。

7. 速記の練習には，鉛筆を用ひても差支ないが，鮮明な點に於て萬年筆が適當である。其ペン先は剛軟中庸のものを選び，始の中は普通のペンを用ひてよろしい。又紙は有罫のものを用ひ，熟達して絕對に字列が亂れないやうになつたならば，始て無罫のものを用ひてよろしい。

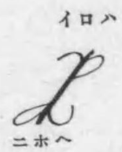
8. 練習帳は，紙を二つに折り中央をとぢて，一頁書終つたら向ふにはねて次にうつる

のである。其置方は無理なく平線を書得る程度に，右の方を上に斜にして，光線は左から受けるやうにする。

9. 速記術は毎日の練習を要求する。一度に長時間の練習をして，其後二三日捨てゝおくのは甚だ不利益である。例へば一週に六時間の練習をしやうとする時，隔日に二時間づつ學ぶよりも，毎日一時間づゝ六回とした方が進歩が早いのである。さうして亂雜に多く習ふよりも，丁寧に少し習つた方が得である。

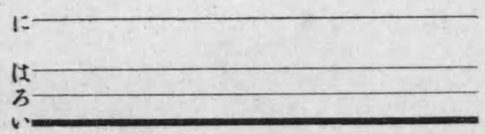
第二章
速記文字

速記文字は，次に示す根元から出來たのである。



イロハを起筆，**ニホヘ**を筆尾と稱へる。總ての文字の幹線は中央の斜線**ロホ**で，此幹線を同じ傾斜に書くのが習字の基礎となるのである。

次に字列と文字の高低とは，書線によつて定めるが，**い**を書線，他を中間線と稱へる。



いにの高さに書くのを二階文字，**いは**の高さのを一階，**いろ**の高さのを半階文字と稱へ

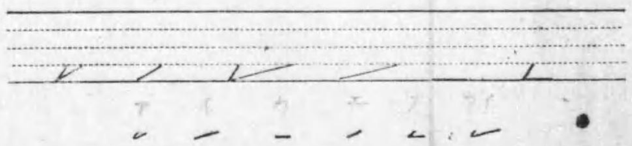
る。二階文字の高さは曲尺一分五厘(より低いのは妨ない)が適當である。

文字の凡例は二つとし，一は字形を明瞭にするため倍大に書き，一は所要の高さに書いたのである。

第一課

母韻

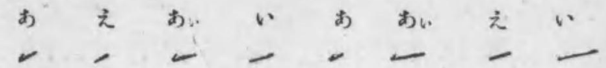
あ　え　あぃ　い　う　お



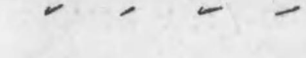
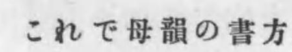
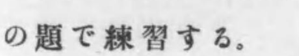
母韻の高さは皆半階で，あいといふ字はあといとを組合せて作つたものである。あとおとあいとについてゐる短線は卽ち幹線で，いとえとは左下より右斜上に向けて書くのである。其斜上線の比較は，あとえとは同じ開きで，あいといとも同じである。又あの開きを倍以上にするといとなるので，次のやうに並

べて書くとよくわかる。

あ　え　あぃ　い　あ　あぃ　え　い



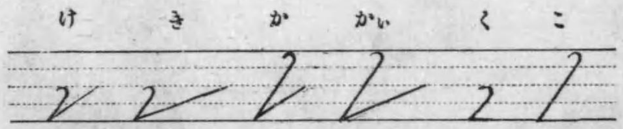
これで母韻の書方が明瞭になつたから，次の題で練習する。

讀方	書方
	あ　え　う　あぃ
	い　お　あ　え
	う　あぃ　い　お

第二課

か行

け　き　か　かぃ　く　こ

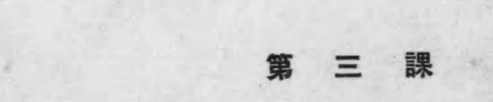


第一行にけきなどゝ並べたのは，母韻の開

きを比較するためで，第二行かかきくけこかいである。

か行の文字は，根元形のイホより出來，起筆は丸く(卽ち鈍く)筆尾は角立てゝ(卽ち鋭く)書くのである。

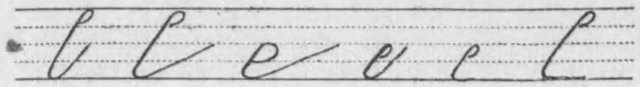
文字の幹線は，同じ傾斜を保つて書かねばならぬのであるが，ウッカリすると弓形になり易い字もあるから，始終此點に留意する事を希望する。又文字の根元は一々説明せずとも，對照すれば直ぐ分るのであるから，次課よりは省く事にする。

讀方	書方
	か く き あ け あぃ い かぃ え う こ お

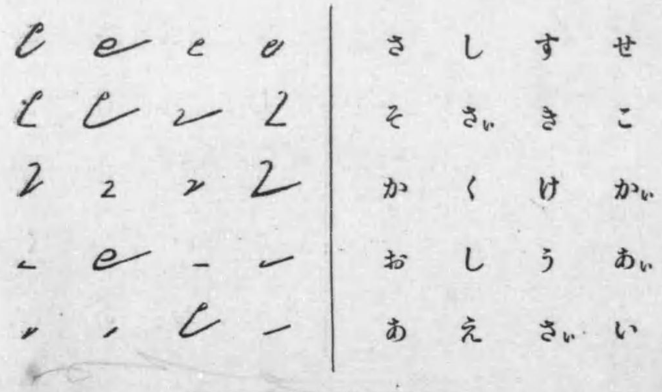
第三課

さ行

さ　さぃ　し　せ　す　そ

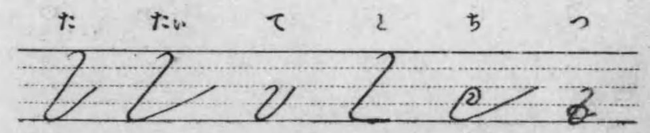


起筆の圓形は，去のみ大きく，他は皆小さく書くのである。

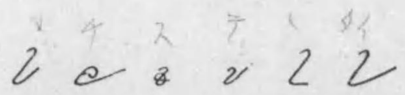
	さ し す せ そ さぃ き こ か く け かぃ お し う あぃ あ え さぃ い

第四課

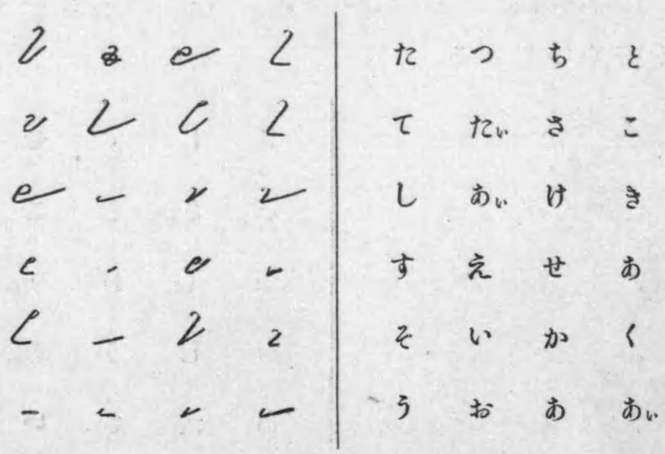
た行



た　たぃ　て　と　ち　つ

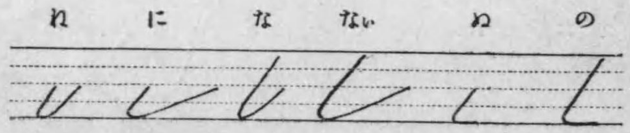


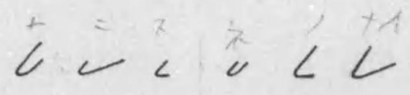
ちの字の圓形内にある小形のての字は，幹線と同じ傾に書いても，次行のやうに平にしても宜しいのである。

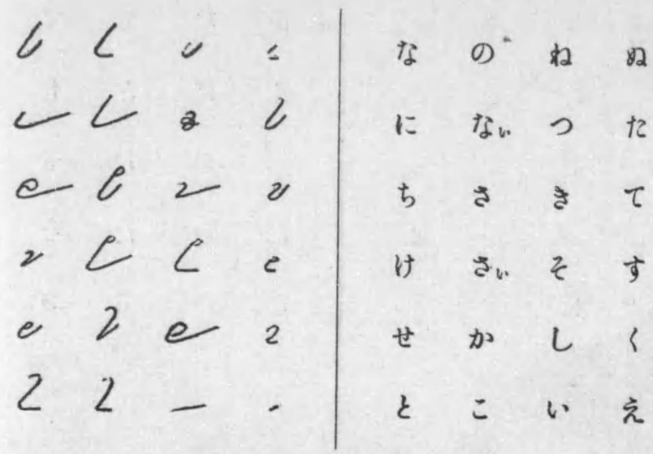


第五課

な行

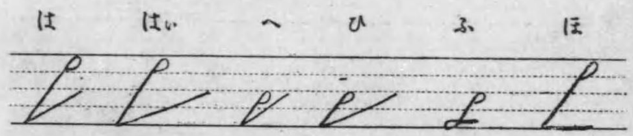


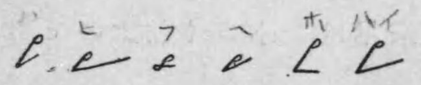




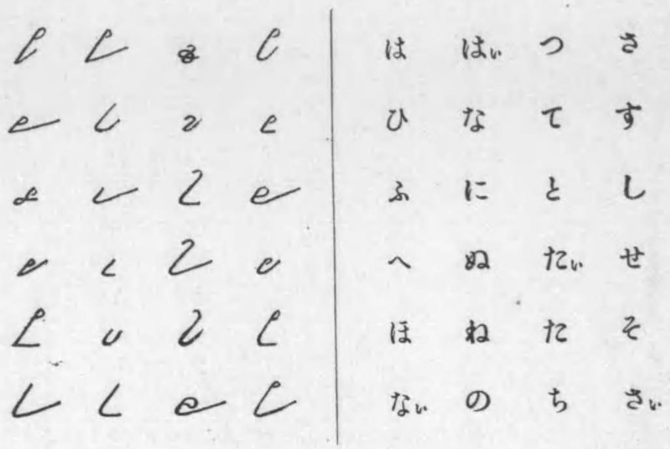
第六課

は行



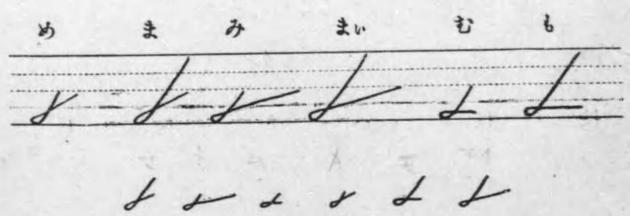


は行上部の圓形と，ふ字上下の圓形とは，共に小さく書くのである。

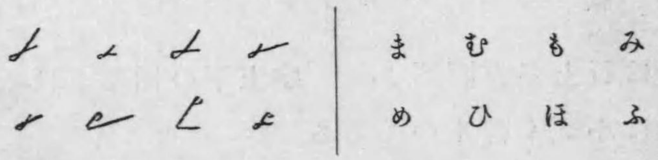


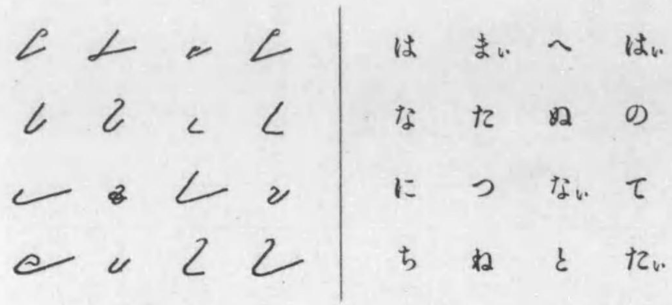
第七課

ま行



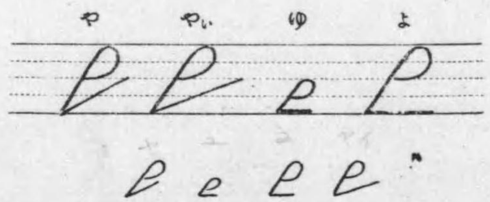
ま行の筆尾は，小さく結ぶのである。



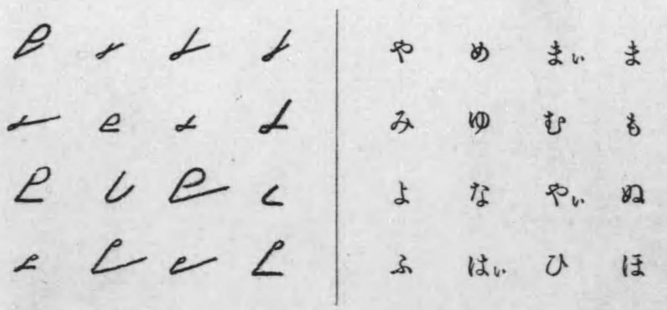


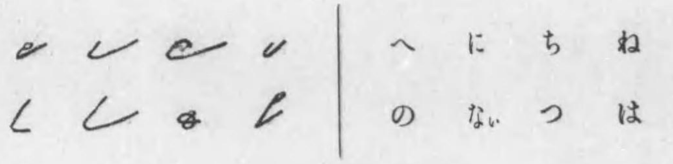
第八課

や行



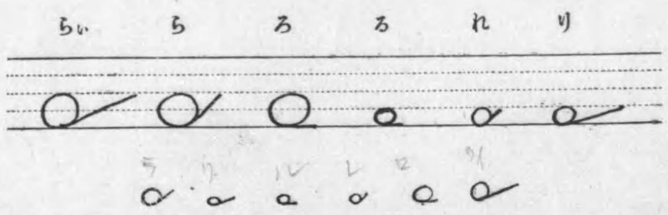
や行起筆の圓形は，大きく書くのである。



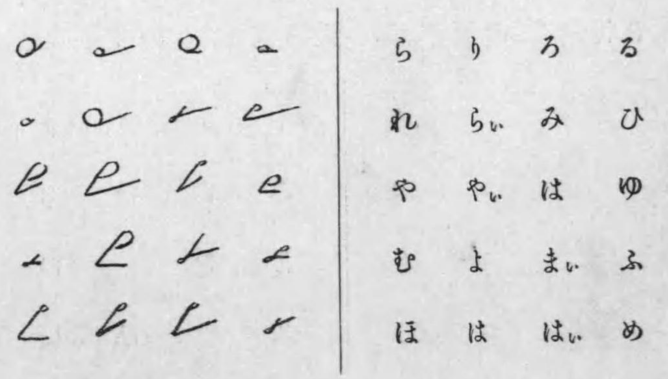


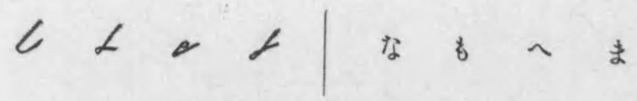
第九課

ら行



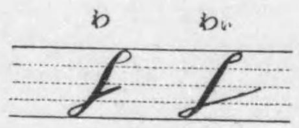
ら行は純圓形で，大形のら,ろ,らいは一階，小形のり,れ,るは半階である。



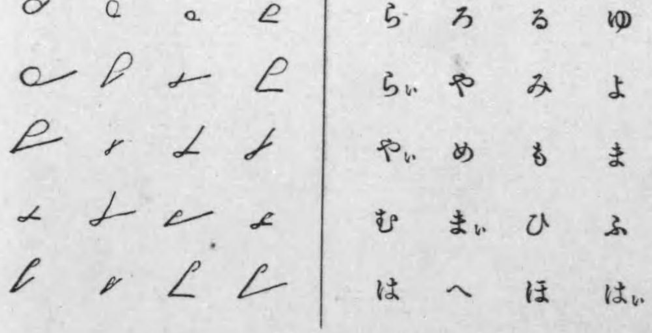


第十課

わ行



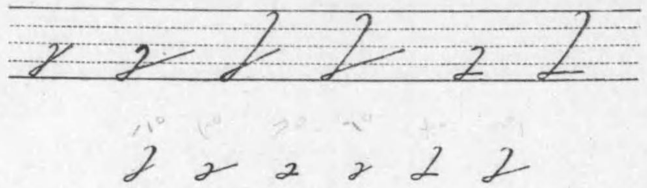
わ行上下の圓形はふと同じく小さく書く。

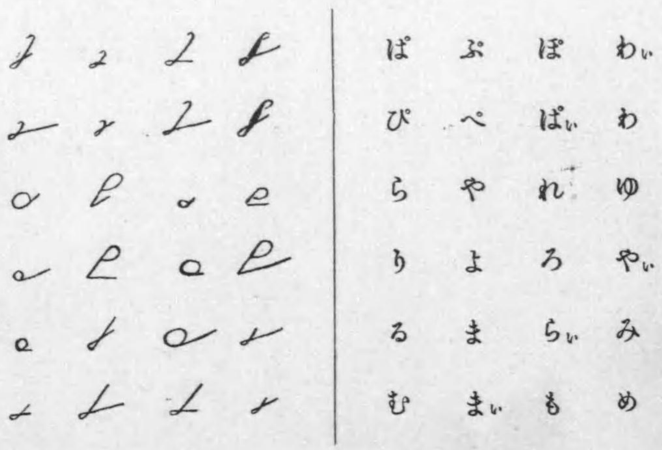


第十一課

ば　行

べ　び　ば　ばぃ　ぶ　ぼ



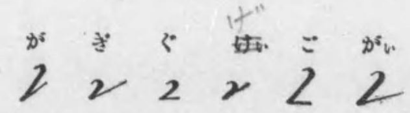


ば	ぶ　ぼ　わぃ
び	べ　ばぃ　わ
ら	や　れ　ゆ
り	よ　ろ　やぃ
る	ま　らぃ　み
む	まぃ　も　め

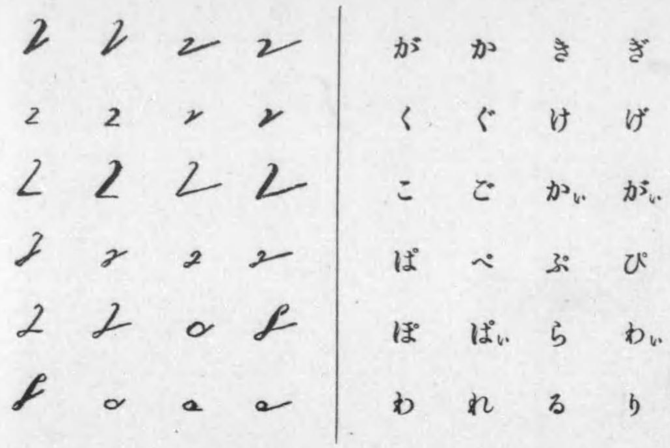
第十二課

が　行

が　ぎ　ぐ　げ　ご　がぃ



本課より倍大の凡例はやめにする。

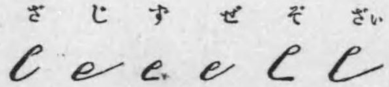


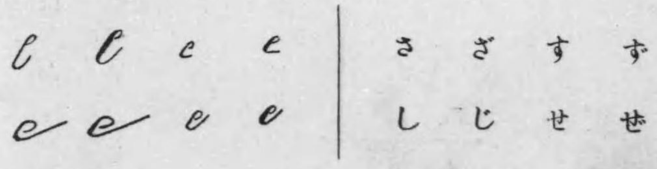
が	か　き　ぎ
く	ぐ　け　げ
こ	ご　かぃ　がぃ
ば	べ　ぶ　び
ぼ	ばぃ　ら　わぃ
わ	れ　る　り

第十三課

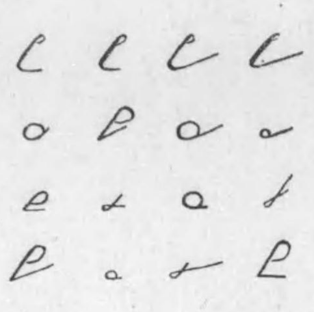
ざ　行

さ　じ　ず　ぜ　ぞ　ざぃ





さ	ざ　す　ず
し	じ　せ　せ

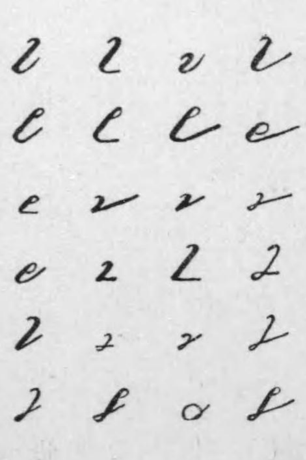


そ　ぞ　さぃ　ざぃ
ら　や　らぃ　り
ゆ　む　ろ　ま
やぃ　る　み　よ

第十四課

だ　行

だ　で　ど　だぃ

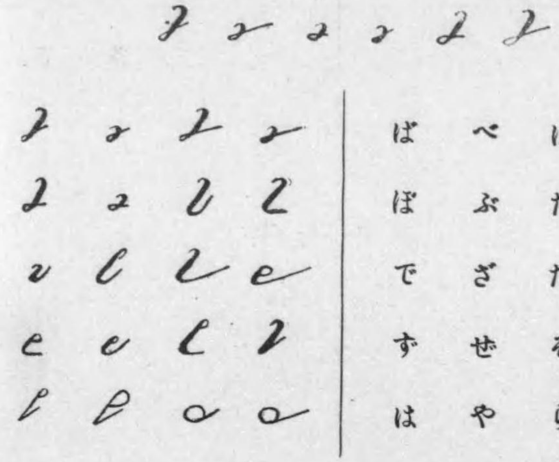


だ　ど　で　だぃ
ざ　ぞ　ざぃ　じ
ず　ぎ　げ　ぴ
せ　ぐ　ご　ぽ
が　ぶ　べ　ぱぃ
ば　わ　ら　わぃ

第十五課

ば　行

ば　び　ぶ　べ　ぼ　ばぃ

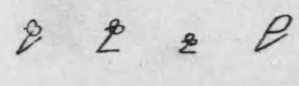


ば　べ　ばぃ　び
ぼ　ぶ　だ　ど
で　ざ　だぃ　じ
ず　せ　ぞ　が
は　や　ら　らぃ

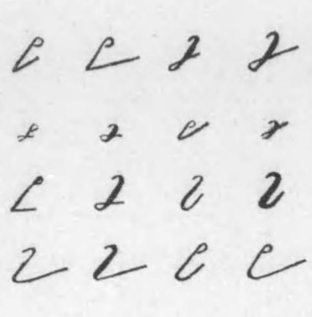
第十六課

きゃ　行

きゃ　きゅ　きょ



きゃ　きょ　きゅ　や

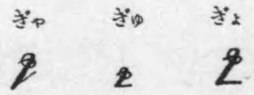


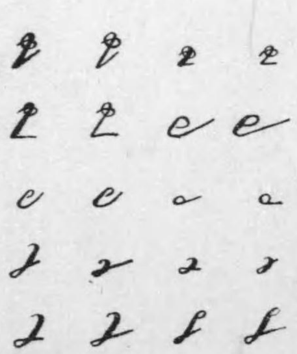
は	はぃ	ば	ばぃ
ふ	ぶ	へ	べ
ほ	ぼ	た	だ
たぃ	だぃ	さ	さぃ

第十七課

ぎゃ　行

ぎゃ　ぎゅ　ぎょ



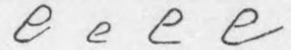


ぎゃ	きゃ	ぎゅ	きゅ
ぎょ	きょ	し	じ
せ	せ	り	る
ば	び	ぶ	べ
ぼ	ばぃ	わ	わぃ

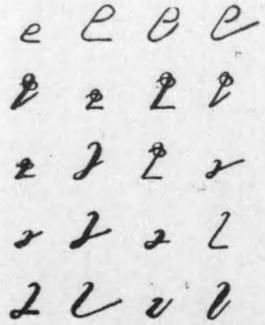
第十八課

しゃ　行

しゃ　しゅ　しょ　しゃぃ



しゃ行の文字はさと同じやうに，起筆の圓形を大きくする。

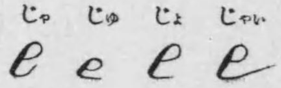


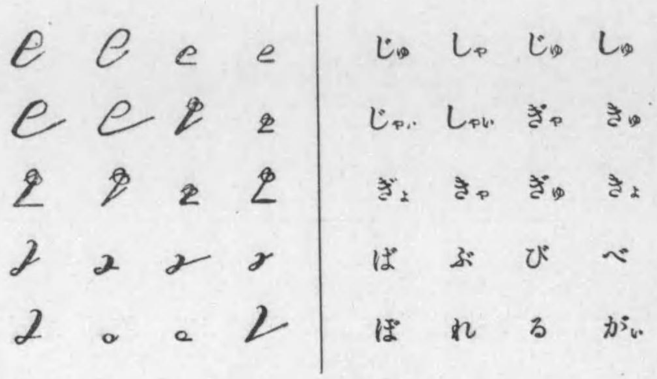
しゅ	しょ	しゃ	しゃぃ
ぎゃ	きゅ	ぎょ	きゃ
ぎゅ	ば	きょ	び
べ	ばぃ	ぶ	と
ぼ	だぃ	で	だ

第十九課

じゃ　行

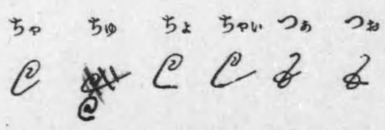
じゃ　じゅ　じょ　じゃぃ



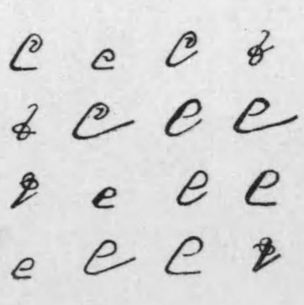


第二十課

ちゃ　行

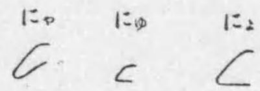


ちゃ行の文字は，第四課のちと同じである。

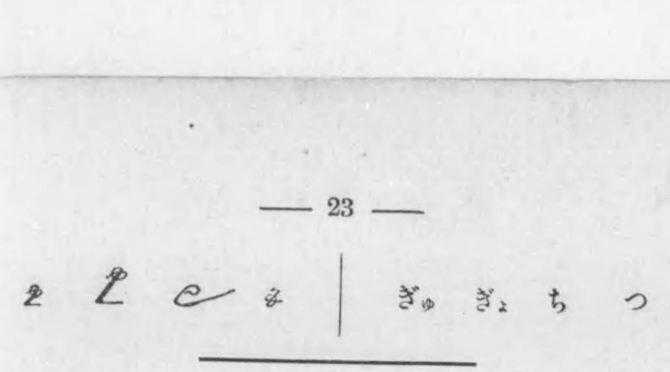


第二十一課

にゃ　行



にゃ行の文字は，な行の起筆を彎曲したものである。



第二十二課

りゃ　行

りゃ　りゅ　りょ

りゃ行の文字は，ら，るろの一部に角をつければよいので，夫が三角形のやうになつても差支はない。

りゃ　ら　りゅ　る	
りょ　ろ　にゅ　にゃ	
にょ　ちゃ　つぁ　ちゅ	
つぉ　ちょ　ちゃい　じゃ	
じょ　しゅ　じゃい　しゃ	

第二十三課

ひゃ　行

ひゃ　ひゅ　ひょ

ひょ　ひゅ　ひゃ　りゃ	

りょ　りゅ　にゃ　にゅ	
ちゃ　にょ　ちゅ　ちょ	
つぁ　ちゃい　つぉ　じゃ	
しょ　じゅ　しゃ　じょ	

第二十四課

ぴゃ　行

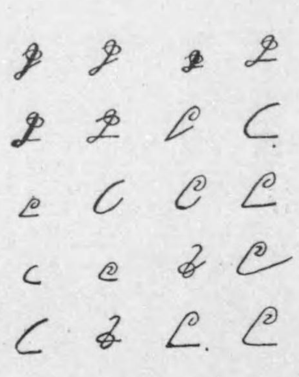
ぴゃ　ぴゅ　ぴょ

ぴゃ　ひゃ　ひゅ　ぴゅ	
ぴょ　ひょ　りゃ　にゃ	
りゅ　ちゃ　にゅ　りょ	
にょ　ちゃい　ちゃ　つぁ	
ちょ　つぉ　す　しゅ	

第二十五課

びゃ　行

びゃ　びゅ　びょ



びゃ　びゃ　びゅ　びょ

びょ　びょ　ひゃ　にょ

ひゅ　にゃ　ちゃ　ひょ

にゅ　ちゅ　つぁ　ちゃい

にょ　つぉ　ひょ　ちょ

第二十六課

みゃ　行

みゃ　みゅ　みょ

みゃ行の文字は，ま行の起筆を彎曲するのみである。

ま　みゃ　む　みゅ

も　みょ　びょ　びゃ

びゅ　みゃ　びゃ　びょ

びゅ　みゅ　ぱ　みょ

みゃ　みょ　みゅ　りゃ

第二編

速記文字連綴編

第三章

假名遣

1. 文字の連綴を說く前に，假名遣について注意を促しておく必要がある。速記したものを普通の文字に書改めるのを復文と稱へ，復文の際は普通の假名遣によるのは無論であるが，速記術では假名遣に頓着なく，發音の儘を記すのである。

2. 家はいえ，顏はかお，三保はみお，庭はにわ，八幡はやわた，鯛はたい，謠はうたい，田舍はいなか，末はすえと書き，ぢづはじずと發音するから其まゝを寫すのである。

3. 長音の假名遣も色々あるけれども，これも發音通りに書くので，一例をあげれば應，

翁，押，大坂のやうなのは，皆おーと記し，弓，久，急はきゆーと寫し，英，計，生はえー，けー，せーと書き，紀伊新潟は妨ない限りきー，にーがたと書いて宜しいのである。

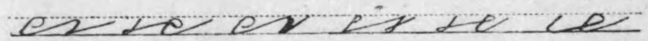
第四章

一階文字相互の連綴

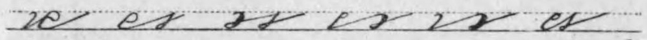
第二十七課

い段とえ段

式　道　繁　姫　店　西



吝　締　美味　燁　黍　蟬

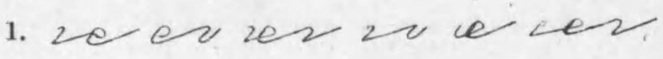
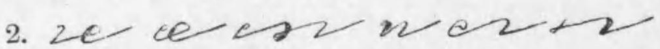
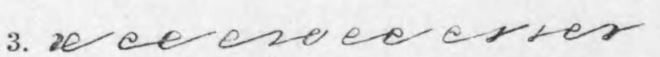
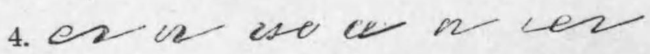
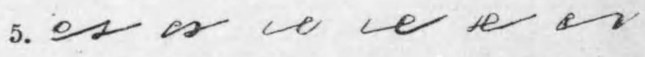


い段とえ段との文字を相互に連綴するには，書線に位置をきめる，といふのは文字の筆尾が書線に止まるやうに書くのである。

凡例の最初に掲げた式，道のやうなのは，しの字の斜上線の終點よりきの字にうつり，一

筆で書くのであるから，きの起筆を角立てず丸味をもたせて卽ち鈍く續け，道のちもみの終點とちの起筆とを續けるのである。又姫,蟬のやうに，起筆の角立つめ,みが後に來る時は,丸くならないやうに,鋭く續けねばならぬ。其他の文字は上例によつて明であらう。

讀　方

1. 
2. 
3. 
4. 
5. 

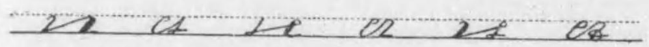
書　方

1. 機智(きち)　仕手(して)　景色(しき)　杵(きね)　捩子(ねじ)　鹿角菜(ひじき)
2. 雉(きじ)　世辭(せじ)　響(ひびき)　劇(げき)　知己(ちき)　右(みぎ)
3. 夏至(げし)　知事(ちじ)　爲着(しきせ)　質(しち)　地味(ちみ)　道火(みちび)
4. 鳴(しぎ)　葱(ねぎ)　出店(でせみ)　是非(ぜひ)　癖(へき)　錦(にしき)
5. 滋味(じみ)　蛇(へび)　贋(にせ)　虹(にじ)　飯(めし)　髯(ひげ)

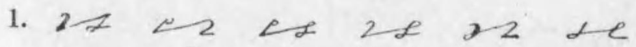
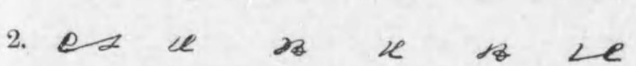
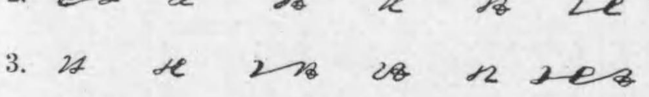
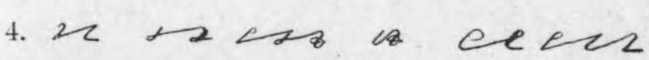
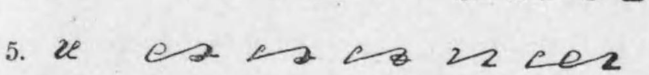
第二十八課

いえ兩段とう段

器具(きぐ)　攻(せむ)　水(みず)　急(せく)　岐阜(ぎふ)　節(せつ)



讀　方

1. 
2. 
3. 
4. 
5. 

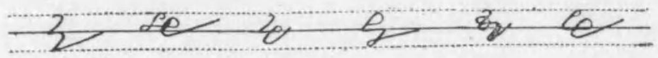
書　方

1. 義務(ぎむ)　引(ひく)　被風(ひふ)　寄附(きふ)　比丘(びく)　御簾(みす)
2. 事務(じむ)　不寐(ねず)　別(べつ)　消(けす)　滅(めつ)　傷(きず)
3. 煙(けむ)　馬頭(めず)　議決(ぎけつ)　鐵(てつ)　めく　美術(びじつ)
4. 絹(きぬ)　壬生(みぶ)　秘密(ひみつ)　熱(ねつ)　靜(しず)　皮肉(ひにく)
5. です　澁(しぶ)　日歩(ひぶ)　櫃(ひつ)　菊(きく)　拉(ひしぐ)

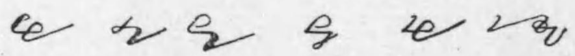
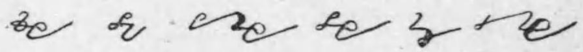
第二十九課

う段といえ段

莖(くき)　富士(ふじ)　癖(くせ)　弓(ゆみ)　黄楊(つげ)　鮨(すし)



う段字の次に來る字は，自然と書線の下に出る。其うつり工合は第二十七課に說いたのと同じである。起筆が圓形になつてをる字は，連續上書線に位置をとる事は出來ないが，夫が爲に文字の高さを變更してはならぬ。

1. 
2.
3.
4. 
5.

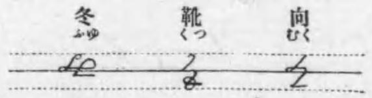
1. 逗子(ずし)　麥(むぎ)　主義(しゅぎ)　夢(ゆめ)　櫛(くし)　狐(きつね)

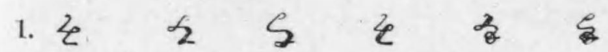
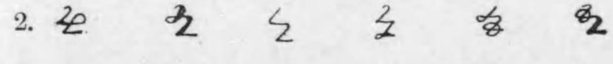
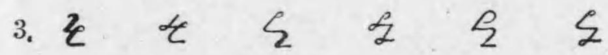
2. 胡頽子(ぐみ)　菅(すげ)　築地(つきじ)　文(ふみ)　常(つね)　傴僂(せむし)
3. 土(つち)　舟(ふね)　樋口(ひぐち)　淵(ふち)　首(くび)　御闕(みくじ)
4. 主(ぬし)　爪(つめ)　御國(みくに)　次(つぎ)　鞭(むち)　菊地(きくち)
5. 指(ゆび)　武備(ぶび)　不思議(ふしぎ)　貫(ぬき)　助(すけ)　深雪(みゆき)

第三十課

う段とう段

冬(ふゆ)　靴(くつ)　向(むく)



1. 
2.
3. 
4. 

1. 樟(くす)　河豚(ふぐ)　統(すぶ)　葛(くず)　佛(ぶつ)　捨(すつ)
2. 悔(くゆ)　武具(ぶぐ)　拔(ぬく)　汲(くむ)　鯉(むつ)　告(つぐ)
3. 愚圖(ぐず)　蒸(むす)　直(すぐ)　踏(ふむ)　行(ゆく)　澄(すむ)

4. 服(ふく)　由布(ゆふ)　供奉(ぐぶ)　伏(ふす)　柚子(ゆず)　脱(ぬぐ)

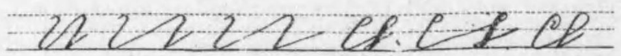
第五章

二階文字相互の連綴

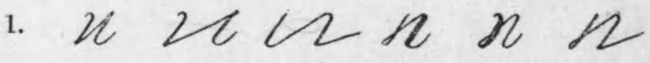
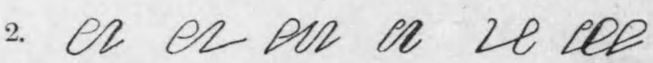
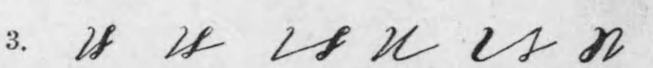
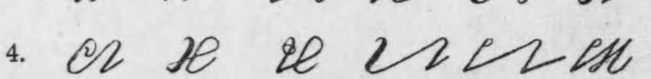
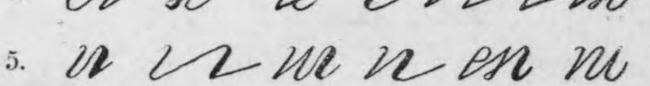
第三十一課

あ段とあ段

鷹(たか)　大家(たいか)　大海(たいかい)　澤(さわ)　幸(さいわい)　茶屋(ちやや)



たとかとを單獨に書けば，たの終點とかの起點とが離れる事になる。それを續けて凡例のやうに書くのである。

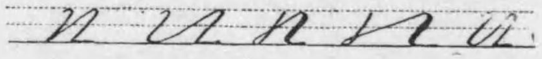
1. 
2. 
3. 
4. 
5. 

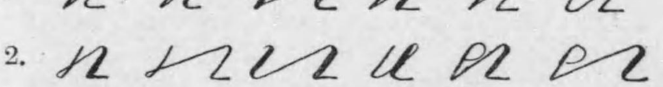
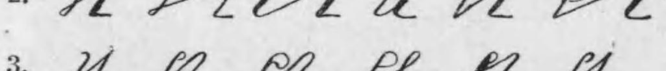
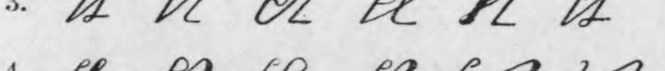
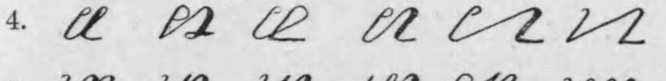
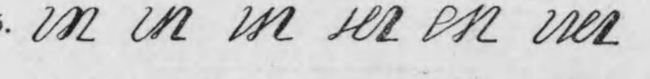
1. 假名(かな)　腕(かいな)　内海(ないかい)　未(まだ)　バタ　魔海(まかい)
2. 釋迦(しやか)　社會(しやかい)　谷中(やなか)　定(さだ)　會社(かいしや)　葉茶屋(はじやや)
3. 川(かわ)　河合(かわい)　會話(かいわ)　家内(かない)　大枚(だいまい)　馬鹿(ばか)
4. 茶菓(ちやか)　馬車(ばしや)　花車(きやしや)　代價(だいか)　俳諧(はいかい)　濱名(はまな)
5. 箍(たが)　大概(たいがい)　カナダ　課題(かだい)　山田(やまだ)　刀(かたな)

第三十二課

あ段とお段

過去(かこ)　太鼓(たいこ)　窓(まど)　毎度(まいど)　凧(たこ)



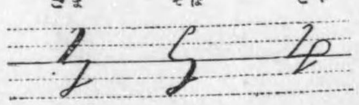
1. 
2. 
3. 
4. 
5. 

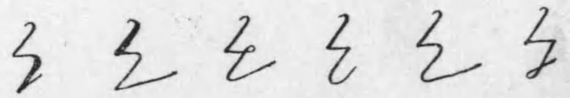
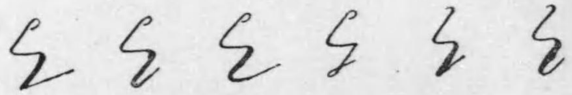
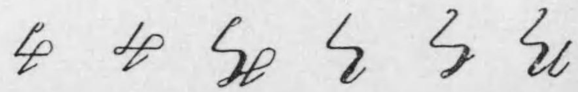
1. 彼(かの)　門(かど)　ガイド　籠(かご)　箱(はこ)　蝦蛄(しゃこ)
2. 孫(まご)　舞子(まいこ)　醍醐(だいご)　謎(なぞ)　宿(やど)　炙(やいど)
3. 鴨(かも)　鳩(はと)　チヤコ　耶蘇(やそ)　若子(わこ)　鱧(はも)
4. 嘸(さぞ)　野暮(やぼ)　小夜(さよ)　佐渡(さど)　再度(さいど)　蠶(かいこ)
5. 莨(たばこ)　玉子(たまご)　竈(かまど)　眞砂(まさご)　大和(やまと)　高砂(たかさご)

第三十三課

お段とあ段

胡麻(ごま)　蕎麥(そば)　小屋(やこ)



1. 
2. 
3. 

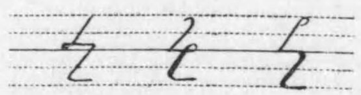
---

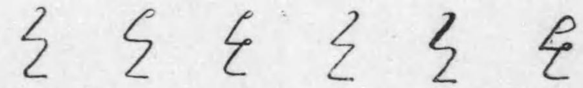
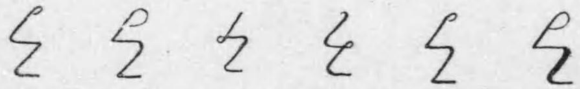
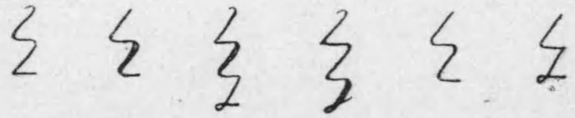
1. 古雅(こが)　誤解(ごかい)　巨細(こさい)　粉(こな)　固體(こたい)　駒(こま)
2. 阻害(そがい)　粗朶(そだ)　粗大(そだい)　杣(そま)　栂(とが)　戸田(とだ)
3. 火屋(ほや)　靄(もや)　蕎麥屋(そばや)　野田(のだ)　鳥羽(とば)　戸棚(とだな)

第三十四課

お段とお段

物(もの)　去年(こぞ)　程(ほど)



1. 
2. 
3. 

---

1. 事(こと)　其處(そこ)　細(ほそ)　此(この)　何處(どこ)　餘所(よそ)
2. 其(その)　横(よこ)　元(もと)　屠蘇(とそ)　鋒(ほこ)　淀(よど)

3. 床(とこ)　喉(のど)　子供(こども)　言葉(ことば)　能登(のと)　のも

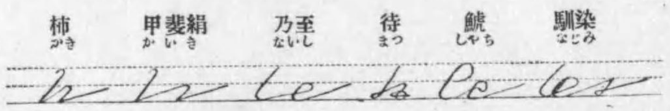
第六章

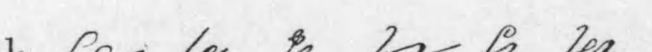
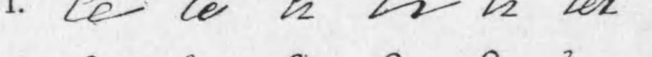
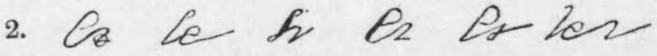
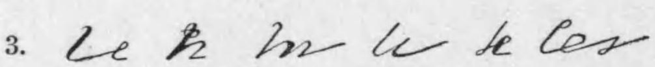
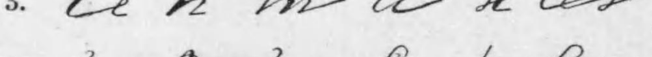
一階二階字相互の連綴

第三十五課

あ段といえう段

柿(かき)　甲斐絹(かいき)　乃至(ないし)　待(まつ)　鯱(しやち)　馴染(なじみ)



1. 
2. 
3. 
4. 
5. 

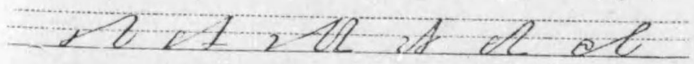
1. 奢侈(しやし)　何故(なぜ)　客(きやく)　會議(かいぎ)　百(ひやく)　稼(かせぐ)
2. シヤツ　蜂(はち)　譯(わけ)　弱(じやく)　闇(やみ)　勝氣(かちき)

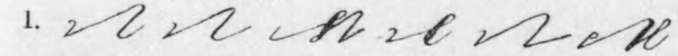
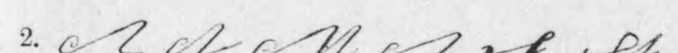
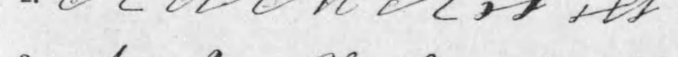
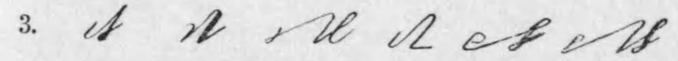
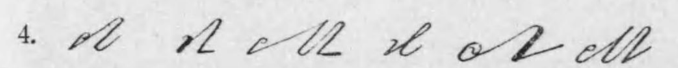
3. 臺子(だいす)　逆(ぎやく)　歌劇(かげき)　何(なに)　先(まず)　刺身(さしみ)
4. 民(たみ)　百(ひやく)　舵木(かじき)　着(ちやく)　町(まち)　射的(しやてき)
5. 茶器(ちやき)　脈(みやく)　指圖(さしず)　橋(はし)　鷲(わし)　立見(たちみ)

第三十六課

いえ段とあお段

三田(みた)　紐(ひも)　黄粉(きなこ)　手間(てま)　瀬戸(せと)　高萱(ちさ)



1. 
2. 
3. 
4. 
5. 

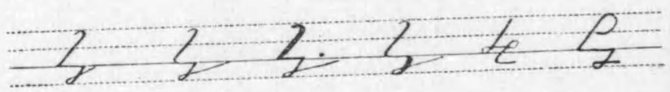
1. 北(きた)　氣體(きたい)　俄(にわか)　氣障(きざ)　器械(きかい)　日傘(ひがさ)
2. チト　世界(せかい)　仕方(しかた)　人(ひと)　琵琶(びわ)　深山(みやま)

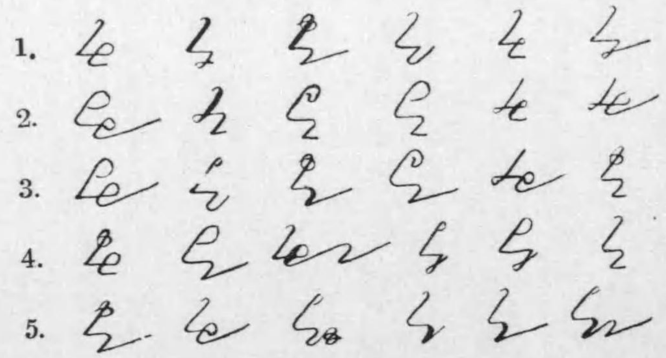
3. 寐間　怪我　三笠　猫　皺　氷川
4. 蓐　下戸　日名子　今朝　違　背中
5. 臍　世話　平凡　世帶　膝　目高

第三十七課

あ段といえう段

米　富　芥　鳶　もす　讀





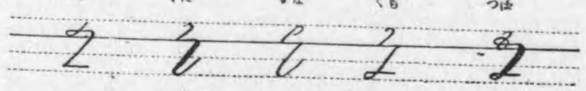
1. 古酒　護謨　御忌　利根　越　込

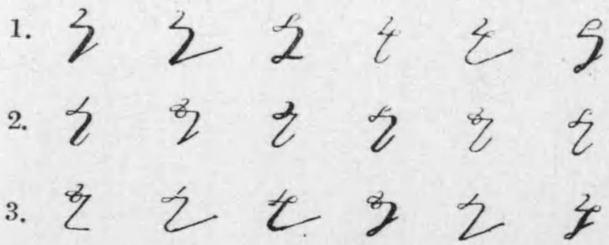
2. 處置　僕　猪口　食　百舌　若
3. 葭　骨　虚僞　猪牙　餅　局
4. 擧手　暑氣　乞食　譽　嫁　德
5. 虚器　土地　蘇鐵　棘　伽　狙擊

第三十八課

う段とあお段

聟　管　砂　雲　坪





1. 陸　苦界　父母　草　臭　湯葉
2. 徒　塚　撫　札　綱　鮒

3. 角(つの)　無體(むたい)　無罪(むざい)　唾(つば)　向(むかい)　鍬(くわ)

第七章

母韻の連綴

第三十九課

母韻相互の連綴

家(いえ)　老(おい)　青(あお)　魚(うお)　庵(いお)　居合(いあい)

母韻を連綴するには，字と字との間を，首尾鋭い半階の斜線でつなぎ，あお,あいが後に來る時は，濃い斜線でつなぐのである。

1.

2.

1. 逢(あう)　會(あえ)　魚(うお)　遺愛(いあい)　有爲(うい)　甥(おい)
2. 葵(あおい)　詠(えい)　終(おえ)　上(うえ)　青繪(あおえ)　相生(あいおい)

第四十課

母韻と一階文字

雨(あめ)　愛兒(あいじ)　落(おち)　笛(ふえ)　消(きえ)　稀有(けう)

1.

2.

3.

4.

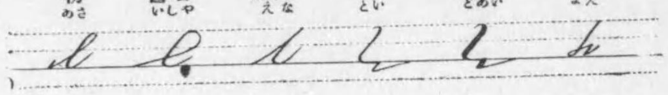
5.

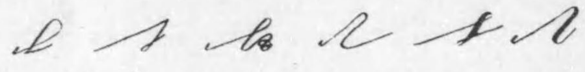
1. 網(あみ)　伊勢(いせ)　萎靡(いび)　池(いけ)　汗(あせ)　植木(うえき)
2. 愛智(あいち)　與津(おきつ)　碓氷(うすい)　意地(いじ)　相手(あいて)　教(おしえ)
3. 相圖(あいや)　足尾(あしお)　敢(あえて)　腕(うで)　海老(えび)　打(うつ)
4. 氣合(きあい)　見合(みあい)　無爲(むい)　工合(ぐあい)　杭(くえ)　ブイ
5. 氣宇(きう)　笛(ふえ)　澪(みお)　智慧(ちえ)　仕合(しあい)　杖(つえ)

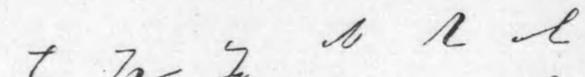
第四十一課

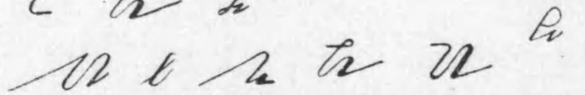
母韻と二階文字

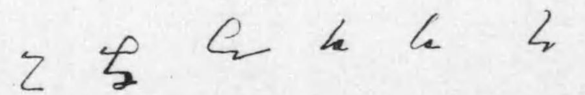
朝(あさ)　醫者(いしや)　胞衣(えな)　問(とい)　度合(どあい)　前(まえ)

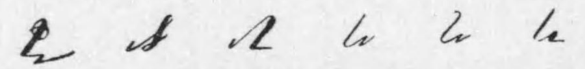


1. 

2. 

3. 

4. 

5. 

1. 綾(あや)　今(いま)　挨拶(あいさつ)　價(あたい)　祝(いはい)　間(あいだ)
2. 虚言(うそ)　鰻(うなぎ)　御前(おまえ)　穴(あな)　江戸(えど)　愛想(あいそ)
3. 田舍(いなか)　餌(えさ)　伊香保(いかお)　兎(うさぎ)　疑(うたがい)　八重(やえ)
4. 斧(おの)　及(およぶ)　所爲(しよい)　顔(かお)　竿(さお)　聲(こえ)
5. 御意(ぎよい)　粟(あわ)　顎(あご)　苗(なえ)　妙(たえ)　猶(なお)

第八章

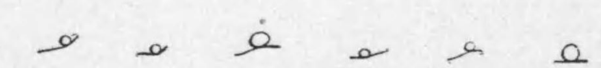
ら行の連綴

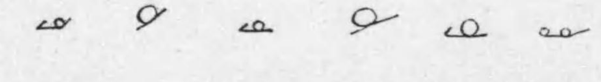
第四十二課

母韻とら行

以來(いらい)　襟(えり)　霰(あられ)　賣(うり)　折(おり)　おら

1.

2. 

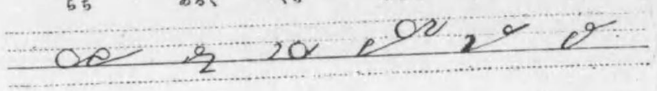
3. 

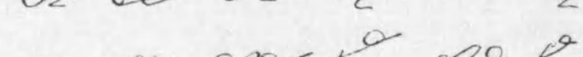
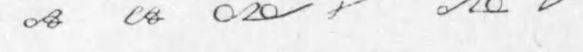
1. 蟻(あり)　荒(あれ)　洗(あらい)　或(ある)　あろ　入(いり)
2. 入(いれ)　末(うれ)　色(いろ)　瓜(うり)　鑄(いる)　虚(うろ)
3. 己(おれ)　鰓(えら)　居(おる)　えらい　おろ　瑠璃(るり)

第四十三課

一階文字とら行

埒(らち)　歩行(あるく)　藏(くら)　平手(ひらて)　義理(ぎり)　芹(せり)



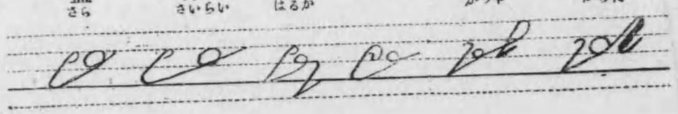
1. 
2. 
3.

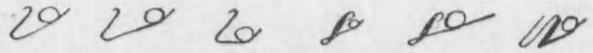
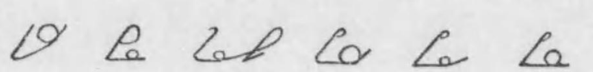
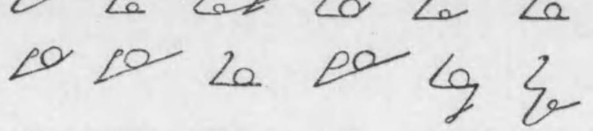
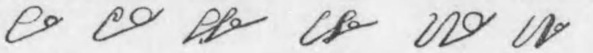
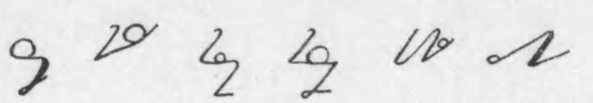
1. 樂(らく)　利子(りし)　栗鼠(りす)　留守(るす)　暦(れき)　錄(ろく)
2. 列(れつ)　切(せつ)　落雷(らくらい)　未來(みらい)　陸路(りくろ)　減(へる)
3. 掏摸(すり)　室(むろ)　城(しろ)　見(みる)　無理(むり)　周(ぐるり)

第四十四課

二階文字とら行

皿(さら)　再來(さいらい)　遙(はるか)　ちやり　借屋(かりや)　體(からだ)



1. 
2. 
3. 
4. 
5. 

1. 鱈(たら)　平(たいら)　虎(とら)　我(われ)　笑(わらい)　乍(ながら)
2. 奈良(なら)　夜(よる)　鳥屋(とりや)　空(そら)　堀(ほり)　母衣(ほろ)
3. 原(はら)　拂(はらい)　頃(ころ)　矢來(やらい)　鈍間(のろま)　隣(となり)
4. 洒落(しやれ)　ちやら　矢張(やはり)　障(さはり)　寶(たから)　流(ながれ)
5. 驢馬(ろば)　唐(から)　土耳其(とるこ)　衣(ころも)　勿(なかれ)　利害(りがい)

第九章

鼻聲促聲長音の書方

暗音(あんおん)のやうな鼻聲を示すには，其文字の上に横線をつけ，あっと，おっと，のやうな詰る聲を表

はすには，其文字の上に・點をつけるのである。又長音を表はすには，其文字の上に短斜線をつけるのと，母韻線の長さを二倍に引延ばすとの二方法がある。省略の書方では，前者を用ひる事があるけれども，非省略の書方では，必ず後者を用ひるのである。

鼻聲促聲については，練習の必要を認めないから，凡例だけにして，直に長音の書方にうつる。

天氣（てんき）　原案（げんあん）　艱難（かんなん）　扇子（せんす）　千金丹（せんきんたん）　安心（あんしん）

節句（せつく）　立身（りつしん）　厄介（やつかい）　丁稚（でつち）　おとっつあん　御馳走（ごっつおー）

第四十五課

一階字長音(母韻)の連綴

兄弟（けーてー）　空地（くーち）　牛乳（ぎゅーにゅー）　命令（めーれー）　雲泥（うんでー）　料理（りょーり）

清涼（せーりょー）　政友（せーゆー）　計數（けーすー）　氣流（きりゅー）　計略（けーりゃく）　アーチ

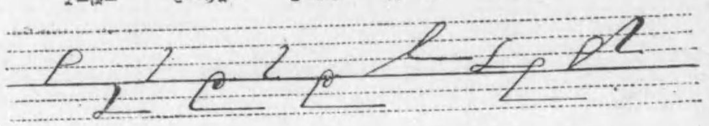
1.
2.
3.
4.
5.

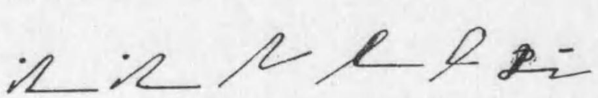
1. 憲政（げんせー）　ビール　低級（てーきゅー）　輕便（けーべん）　政令（せーれー）　辨明（べんめー）
2. 經理（けーり）　帝王（てーおー）　晴雨（せーう）　明治（めーじ）　壓制（あつせー）　懸命（けんめー）
3. 製絲（せーし）　兵器（へーき）　提携（てーけー）　生計（せーけー）　ミーラ　綾羅（りょーら）
4. 中流（ちゅーりゅー）　急流（きゅーりゅー）　琉球（りゅーきゅー）　歐米（おーべー）　奥州（おーしゅー）　周旋（しゅーせん）
5. 風聞（ふーぶん）　九州（きゅーしゅー）　横領（おーりょー）　ビーフ　榮轉（えーてん）　烏籠（うーろん）

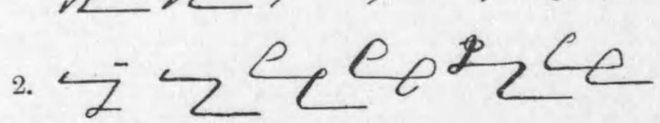
第四十六課

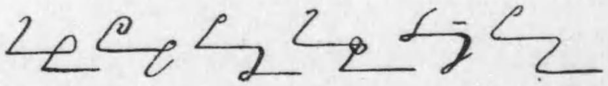
二階字長音(母韻)の連綴

容貌(よーほー)　校長(こーちょー)　投票(とーひょー)　詠草(えーそう)　妙法(みょーほー)　ヤート



1. 

2. 

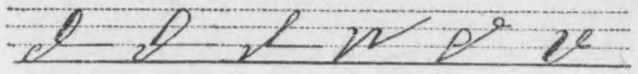
3. 

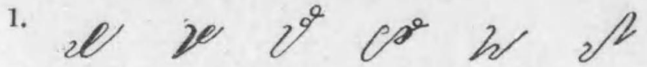
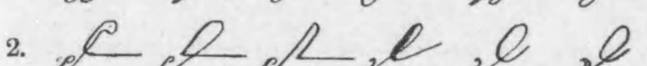
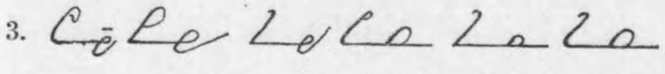
1. 惡口(あつこー)　壓倒(あつとー)　永代(えーたい)　營造(えーぞー)　榮譽(えーよ)　病院(びょーいん)
2. 大門(おーもん)　應答(おーとー)　肖像(しょーぞー)　乘車(じょーしや)　平等(びょーどー)　宗匠(そーしょー)
3. 公用(こーよー)　調査(ちょーさ)　方々(ほーほー)　東京(とーきょー)　明晩(みょーばん)　相當(そーとー)

第四十七課

一階文字長音と二階字長音

製造(せーぞー)　提要(てーよー)　刑法(けーほー)　カーキー　ヤール　ダース



1. 
2. 
3.
4. 

1. テザー　ガーゼ　ターレル　サーベル　家庭(かてー)　定價(てーか)
2. 成長(せーちょー)　西洋(せーよー)　成功(せーこー)　經濟(けーざい)　停車(てーしや)　藝者(げーしや)
3. 朝鮮(ちょーせん)　養子(よーし)　後世(こーせー)　惣領(そーりょー)　拘留(こーりゅー)　棟梁(とーりょー)
4. 勞働(ろーどー)　仲裁(ちゅーさい)　老病(ろーびょー)　妙齡(みょーれー)　表裏(ひょーり)　講習(こーしゅー)

第十章

疊字

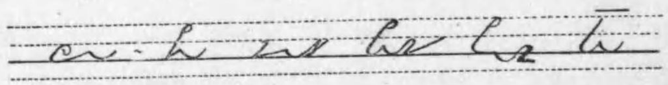
同一の速記文字を重ねるのを疊字といひ,

半階の彎狀符を用ひる。同一文字を其まゝ受繼ぐ時は ⌣,同一文字を長音で受繼ぐ時は ⌣,二音以上を其まゝに受ける時は ⌣ 符を用ひる。さうして連續の工合は母韻と同じやうにする。又速記文字を書いた方が便利な時は,彎狀符用ひるには及ばない。

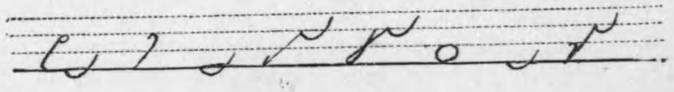
第四十八課

輕音疊字

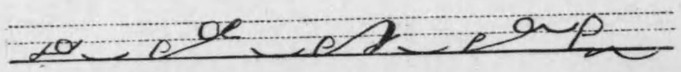
父(ち・) 母(は・) 利目(きゝめ) 佐々木(さゝき) 注(そゝぐ) 喃々(なんなん)



粗相(そそー) 考行(こーこー) あーあー まーまー 涙々(ろーろー) 輕々(けーけー)

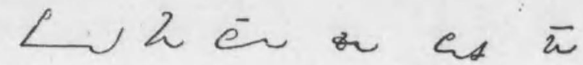
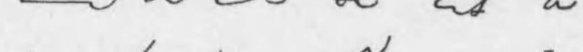
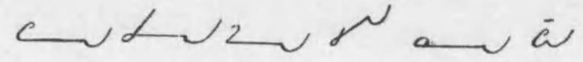


斑々(むらむら) 不知不知(しらずしらず) 屢々(しばしば) 片々(ひらひら) よいよい



三行目の疊音符は前字と續けても,離して

書いても勝手である。

1. 
2. 
3. 
4.

---

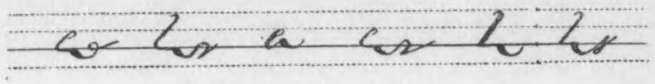
1. 方法(ほーほー) 呵々(かゝ) 紳士(しんし) 筒(つゝ) 進(すゝむ) 點々(てんてん)
2. すーすー もーもー 空々(くーくー) 名々(めーめー) 隆々(りゅーりゅー) 先生(せんせー)
3. ヒヤヒヤ 皆々(みなみな) キビキビ 度々(たびたび) 能々(よくよく)
4. うまうま 是は是は(これわこれわ) 延々(のびのび) 闇々(やみやみ) ハイハイ ゆくゆく

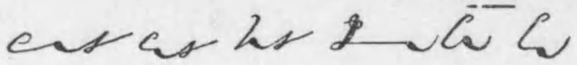
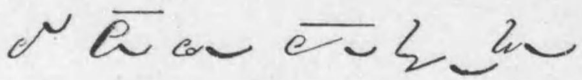
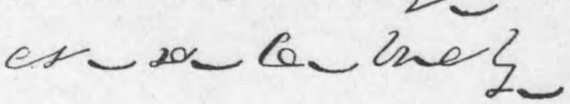
第四十九課

重音疊字

同一の速記文字を重く受ける時は,半階の ⌣,重い長音で受ける時は ⌣,二音以上で最初の音を重く受繼ぐ時は ⌣ 符を用ひる。

硯（すゞり）　届（とゞけ）　膳所（ぜゞ）　鱸（すゞき）　午後（ごご）　粉米（こゞめ）

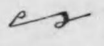


1. 
2. 
3. 

1. 蜆（しゞみ）　凉（すゞみ）　鏡（かゞみ）　渺々（びよーびよー）　散々（さんざん）　粗造（そゞー）
2. 精々（せーぜー）　ジャンジャン　擦々（すれすれ）　信心（しんじん）　時々（ときどき）　絶々（たえだえ）
3. 染々（しゝじみ）　ぶらぶら　ぞろぞろ　猛々（たけだけし）　共々（ともども）

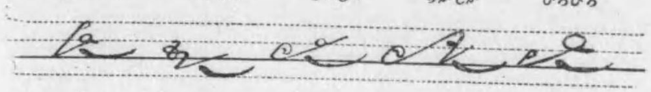
第五十課

疊字の特別法

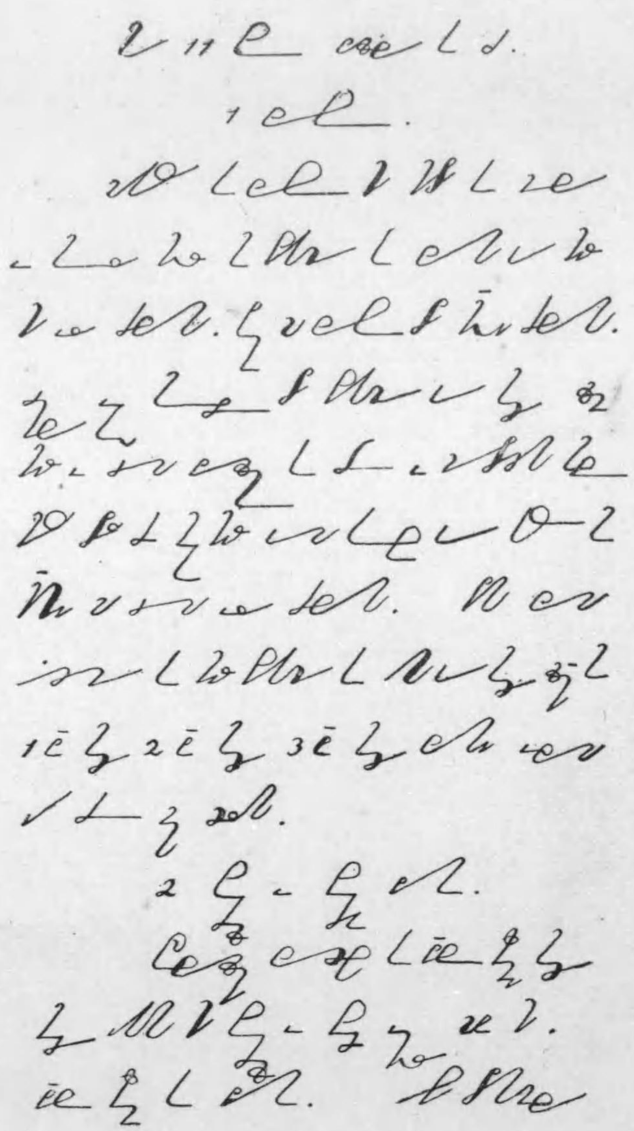
普通の假名遣では音質の如何に係はらず，同一の字に濁符を附けて受繼ぐけれども，疊字法は同一の速記文字のみに使用するのであるから，  日々（ひゞ） 幅（はゞ） 略（ほゞ）のやうに

書かねばならぬ。一音を受繼ぐ時は此正則による事とし，二音以上を違つた速記文字で受ける時は變則を用ひ，彎狀符の位置を次のやうにかへて表はす事にする。

遂々（はるはる）　月々（つきずき）　散々（ちりぢり）　近々（ちかぢか）　廣々（ひろびろ）



速記文字と其連綴の方法とは，本課を以て終を告げたから，淀みなくスラスラ書けるまで練習して，其後省略科に進むことを希望する。



第十一章

綴字の例

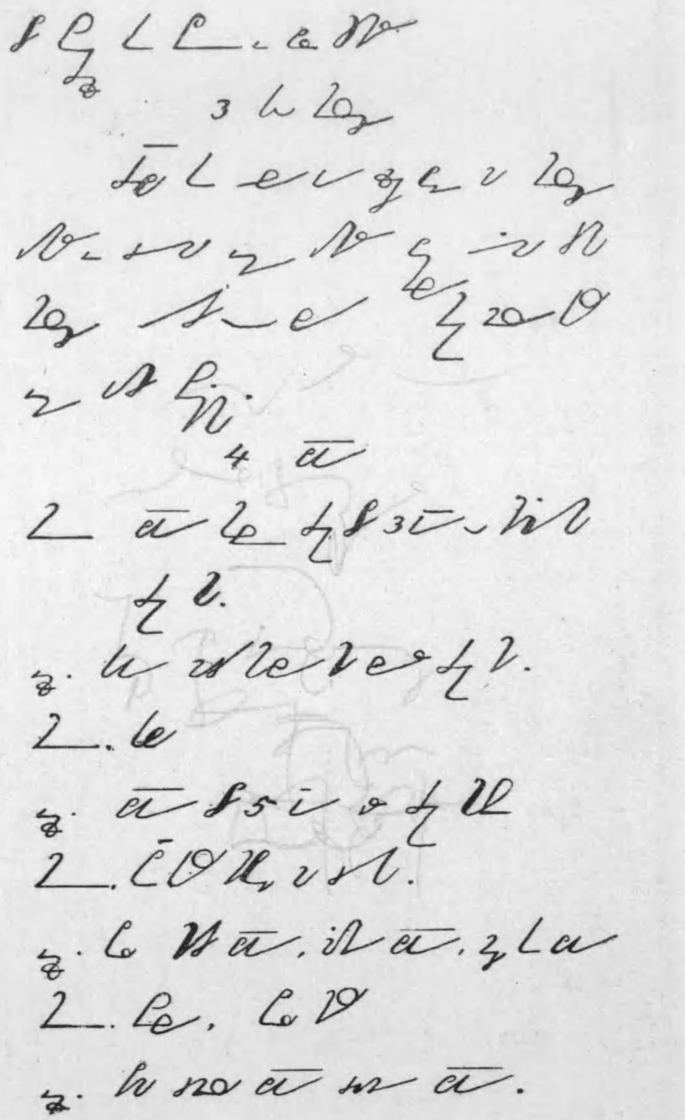
1. 師匠

手習の師匠が川の岸を通りかゝると柳の下に蛙が居りました. そこで師匠わ考えました昔小野の道風わ柳に飛びつく蛙お見て筆道の妙お極めたと云ふから我も此蛙にて能書にならうと考えて見て居りました果して一疋の蛙柳の枝に飛びつかんと一寸飛び二寸飛び三寸飛び下へ落ちてあーもーくたぶれた。

2. 書物お讀まぬ人

著述家 新聞社の編輯局に飛び込み あなたが書物お讀むお係ですか

編輯局の人　　イヤ わたくし



わ　書物　の　評　お　する　ばかり。

3.　七　ころび

門前　の　石　に　つま　ずい　て　ころび　あたり　お　見て　起き　上り　少し　いつて　また　ころび　いま　いま　しい　この　くらい　なら　おき　ねば　よかつた。

4.　仙　人

甲　仙人　と云ふ　もの　わ　三人　に　限つた　もの　だ。

乙　ナニ　てめー　たち　が　知る　もの　か。

甲　なぜ。

乙　仙人　わ　五人　ある　もの　だよ。

甲　そん　なら　數え　て　見な。

乙　それ　蝦蟇　仙人　鐵拐　仙人　久米　の　仙人。

甲　よし　それ　から。

乙　はて　盲　仙人　目明　仙人。

第弐回本館のみ。これなり。

第二部

高等速記術

第三編

省略編

非省略の書方を修了したから，省略法の説明にうつる。この省略法は一課毎に，運筆數を減ずるから，自然と興味が湧いて來るのである。

先づ略韻略音の課程を學び，最後の自由略法に達して，始て各自の手腕を揮ひ得るのであるから，毎日覺えたゞけの課程を應用して，新聞雜誌等の談話文章を書いて見るがよい。要は上滑でなく，確實に理解して漸進すべきである。

第十二章

略韻法

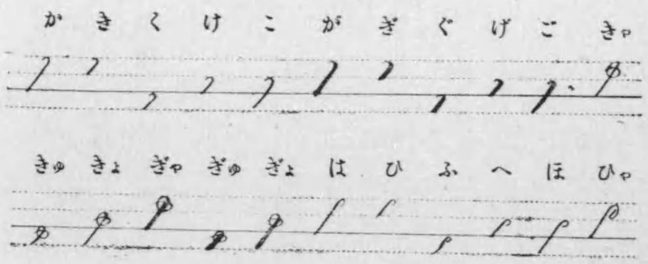
略韻法は，我省略法の根本であつて，舌音全部を除いた他の諸音は，母韻を書かずに，其位置によつて成熟音を表はすので，獨立した一音の母韻を略すのと，一語の終音の母韻を略すとの二方法がある。

第一節

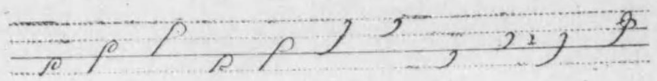
獨立略韻法

第五十一課

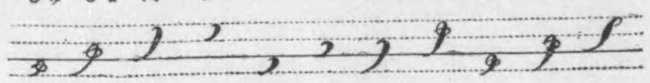
獨立字の略韻



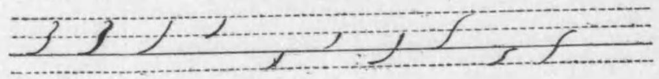
ぴゅ ぴょ　や ゆ よ　ば び ぶ べ ぼ　ぴゃ



びゅ びょ　ば び ぶ べ ぼ　びゃ びゅ びょ　わ



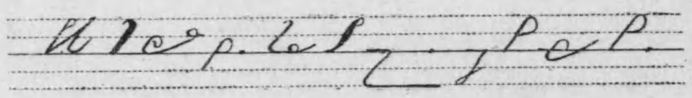
くゎ ぐゎ　ま み む め も　みゃ みゅ みょ



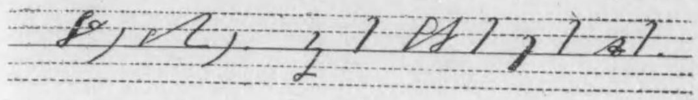
略韻法では，唇音の諸文字は，上記のやうに筆尾を結ばずに，はねたまゝにしておくのである。

かけのやうに，筆尾が書線上にあるのを，中段といひ，きの位置卽ち書線より一階高い位置をとつたのを上段といひ，くこの位置卽ち書線より一階低く位置をとつたのを下段と稱へる。

花が散るよ　鳥は歌ふ　馬や牛や

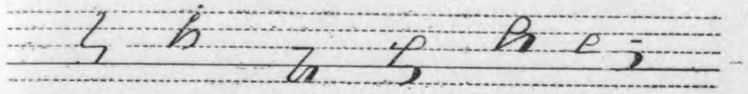


我も人も　雲か山か　吳か越か



第二節
終音略韻法
第五十二課
い韻略法

時　法被　鰻　及　山羊　郵便



うおは書線に位置を取るのがきまりであるのに，一階高く位置をとつたから上段となり，夫に續いて書いたぎもよも上段となるので，後に來た字が高からうと，低からうと，一綴の最初の文字と同位置と見なすのである。此理窟で時のきも及のびも上段といふ事になる。

まみむめもの五字だけは綴字上不便であるから，略音法に讓つて，略韻法では獨立の時

だけに用ひる事とする。

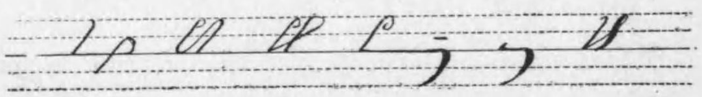
練　習

1. 意氣(いき)　釘(くぎ)　最負(ひーき)　向(むき)　襷(たすき)　葱(ねぎ)
2. 景色(けしき)　鳶(とび)　花火(はなび)　瀧(たき)　媚(こび)　茄子(なすび)
3. 帶(おび)　日々(ひび)　萠黄(もえぎ)　鍵(かぎ)　雪(ゆき)　武備(ぶび)
4. 病氣(びょーき)　速記(そつき)　電氣(でんき)　敵(てき)　兎(うさぎ)　攻擊(こーげき)

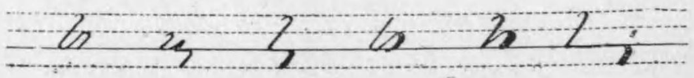
第五十三課

あえ韻略法

紺屋　坂　早　評判　伯母　川



竹　手桶　棘　鍋　影　工藝



上例中のはけげの三字は，前課で説いたやうに前字の位置に從つて，中段と見なすのである。又評判のん符,工藝の長音符及び前課にある郵便のん符,法被の詰聲符は，前後の關係

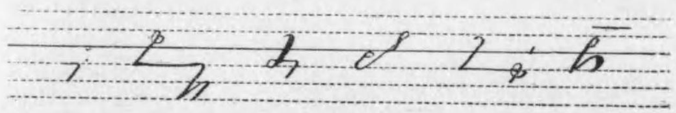
上判讀し得るものは省いて宜しい。

1. 田舍(いなか)　確(たしか)　晦日(みそか)　中(なか)　墓(はか)　池(いけ)
2. 昨夜(さくや)　側(そば)　親(おや)　牙(きば)　綾(あや)　練兵(れんぺー)
3. 日除(ひよけ)　髯(ひげ)　譯(わけ)　我(わが)　負(まけ)　喇叭(らつぱ)
4. 神戸(こーべ)　大阪(おーさか)　桑(くわ)　庭(にわ)　瓢(ふくべ)　宮(みや)

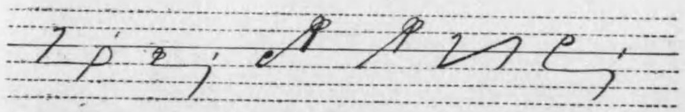
第五十四課

うお韻略法

受　俠客　僕　政府　講究　半分



効用　急行　成業　影響　蠶　草稿



うおの二字を下段に書く時は，書線より一階下に位置をとる。

受のく,急行のこーは，下段よりなほ下にあ

るけれども，前述の通り前字と同位置に見なすのである。又本課の講究効用等につけた長音符も，前に説いたやうに略しても差支ないのである。

1. 岐阜（ぎふ） 客（きやく） 屏風（びよーぶ） 寄附（きふ） 節句（せつく） 籔（やぶ）
2. 幕府（ばくふ） 壬生（みぶ） 發行（はつこー） 玉子（たまご） 株（かぶ） 退歩（たいほ）
3. 進歩（しんぽ） 公共（こーきよー） 東京（とーきよー） 投票（とーひよー） 發表（はつぴよー） 功名（こーみよー）
4. 燈明（とーみよー） 稱揚（しよーよー） 奉公（ほーこー） 工業（こーぎよー） 鵙（ひよ） 强硬（きよーこー）
5. 眉（まゆ） 御代（みよ） 西京（さいきよー） 双方（そーほー） 模樣（もよー） 低級（てーきゆー）

第十三章

略　音　法

略音法とは，成熟音の全體に關する省略の方法で，或は二音語の中，其一音を全く省き，或は母韻の形狀をかへて，運筆を速にする方則であつて，これに二音語三音語四音語五音語の略法があるが，これが基礎となる所の二

音語三音語の略法を理解すれば，他は自然と分るのである。さうして鼻聲促聲は音數に加へず，奏,毛,鏡,料,等の長音は一音として數へる。

略音法には，確定したものと，不確定のものとがある。確定したものは，判然と讀む事が出來るが，不確定のものは幾樣にも讀み得られ，談話文章の前後の關係によつて，讀方がきまるのである。前者については注意を要せぬが，後者は便利すぎて，時に錯誤を惹起す憂があるけれども，それは未熟中の事だけで，熟練すれば其恐はなくなるのである。又此確定と不確定とは，別に説明せずとも一見直に了解されると信ずる。

第三節

二音語略法

第一　か行屬略法

か行屬とは，直音のかきくけこがぎぐげご拗音のきゃ,きゅ,きょ,ぎゃ,ぎゅ,ぎょ,の諸音をいふので

ある。

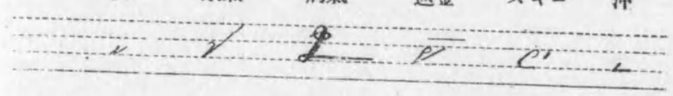
或語の第二音が，**か**行屬の時は，其第一音を略韻法と同じ位置に書くだけて，第二音を表はし得るのである。處で**き**は上段に書いて，少しも紛はないが，**かとけ**とは中段，**くとこ**とは下段に書くのであるから，其間に區別がない。これを明瞭にするには，是非とも略韻法でなければならぬが，さうしなくとも大低は前後の關係で推定し得るのである。又音の輕重を明にする必要ある時は，無論略韻法によらねばならぬが，普通は此區別はなくとも容易に推定が出來るのである。然し推定といふ事は，初學者を躊躇せしむる恐があるから，こゝに一の規定を設けて此混雜を防がう。卽ち二階文字の**かとこ**とは絕對に省いて，一階文字の**けとく**とを略韻法で書く事とする。上達するに從つて推定が容易になるから，特殊の場合の外は此規定を用ふる必要はなくなるのである。

第五十五課

か行上段の略法

か行上段の略法は，次に示す**きぎ**の省き方であつて，最も簡單なものである。

秋　景氣　病氣　返金　スキー　沖



への字の上に**ん**の長い符標をつけると，次の字も**ん**がつく事となつて，返金となるのである。又**ス**の側に，第九章に說いた短斜線の長音符をつけると，次の字の長音を示す事になつて，スキーと讀まれるのである。

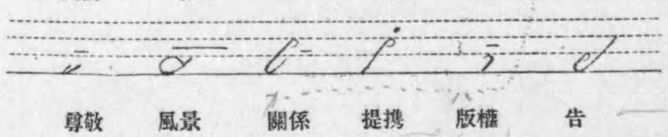
1. 關(せき)　電氣(でんき)　敵(てき)　瀧(たき)　出來(でき)　インキ
2. 益(えき)　速記(そつき)　宸襟(しんきん)　惰氣(だき)　可(べき)　新規(しんき)
3. 息(いき)／異議(いぎ)　式(しき)／仕儀(しぎ)　先(さき)／鷺(さぎ)　幹(みき)／右(みぎ)　向(ひき)／麥(むぎ)　鋤(すき)／杉(すぎ)
4. 勇氣(ゆーき)／遊戲(ゆーぎ)　監禁(かんきん)／感吟(かんぎん)　疝氣(せんき)／詮議(せんぎ)　月(つき)／次(つぎ)　路(ぢき)／不義(ふぎ)　泣(なき)／凪(なぎ)

本課の應用を試みて，輕重の區別を要する時は略韻法で書き，長音符とん符とは推定し得る場合は省いて宜しい。

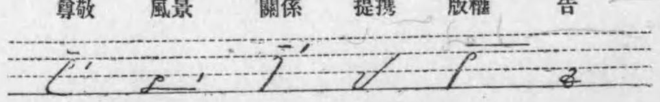
第五十六課

か行中段の略法

安價　欄干　盛　蕩荷　喧嘩　請暇



尊敬　風景　關係　提携　版權　告



前に述べたやうに，下記の各語には略韻法でけを附加へてもよろしい。

1. 足下（そつか）　噴火（ふんか）　結果（けつか）　三毛（みけ）　時計（とけー）　夜景（やけー）

2. 變化（へんか）／變化（へんげ）　馬鹿（ばか）／化（ばけ）　牀（ゆか）／溫氣（ゆげ）　釋迦（しやか）／鮭（しやけ）　發見（はつけん）／發汗（はつかん）　散見（さんけん）／參觀（さんかん）

3. 鱶（ふか）／雲脂（ふけ）　卑下（ひげ）／皮下（ひか）　後家（ごけ）／午下（ごか）　壑（がけ）／畫家（がか）　失火（しつか）／出家（しつけ）　苔（こけ）／焦（こげ）

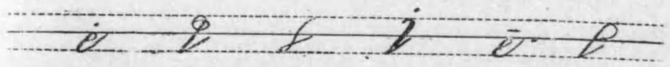
4. 我（わが）／若（わか）　閣下（かつか）／脚氣（かつけ）　賭（かけ）／景（かげ）　和歌（わか）／譯（わけ）　烏賊（いか）／池（いけ）　咎（とが）／棘（とげ）

5. 鷹（たか）／竹（たけ）／稿（たが）　鹿（しか）／時化（しけ）／繁（しげ）　墓（はか）／刷毛（はけ）／禿（はげ）　坂（さか）／酒（さけ）／提（さげ）　負（まけ）／髷（まげ）　向（むけ）／無下（むけ）

第五十七課

か行下段の略法

節句　客　脈　學校　戰功　奴



前に在る三語には，略韻法でくを附加へてもよろしい。

1. 僕（ぼく）　蓮根（れんこん）　コツク　銀行（ぎんこー）　恰好（かつこー）　健康（けんこー）

2. 幕（まく）／孫（まご）　宅（たく）／紙鳶（たこ）　航空（こーくー）／孝行（こーこー）　其處（そこ）／齟齬（そこ）　畫（かく）／嗅（かぐ）　論功（ろんこー）／論語（ろんご）

3. 玩具（がんぐ）／頑固（がんこ）　賢愚（けんぐ）／堅固（けんご）　困苦（こんく）／今後（こんご）　珊瑚（さんご）／參考（さんこー）　炭坑（たんこー）／タンク　點呼（てんこ）／天狗（てんぐ）

4. 線香(せんこー) 戰後(せんご) 各區(かつく) 括弧(かつこ) 眞言(しんごん) 進軍(しんぐん) 汁粉(しるこ) シルク 大工(だいく) 大根(だいこ) 過渡(かと) 角(かど)

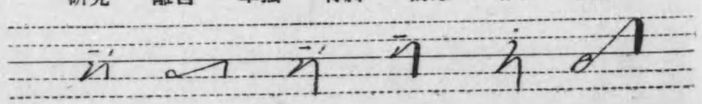
5. 臨幸(りんこー) 林區(りんく) 林檎(りんご) 說(とく) 研(とぐ) 床(とこ) 箔(はく) 剝(はぐ) 箱(はこ) 糝粉(しんこ) 辛苦(しんく) 寢具(しんぐ) 擔桶(たご) 蛸(たこ) 宅(たく) 家具(かぐ) 過去(かこ) 籠(かご)

第五十八課

か行拗音の略法

拗音を省くのも，以上示した直音と同じ仕方で宜しいけれども，すべて此やうにする時は，他と紛れやすいから，これを防ぐ方法を設けねばならぬ。卽ち直音の文字を直立體にかへて拗音を表はすのである。この直立體文字連續の仕方が，今までのと少し違つてをるのもあるから，比較して見るが宜しい。

研究　離宮　牽强　行脚　割據　請求　成業



1. 至急(しきゅー) 恩給(おんきゅー) 緩急(かんきゅー) 進級(しんきゅー) 特急(とつきゅー) 月給(げつきゅー)
2. 地球(ちきゅー) 永久(えーきゅー) 論究(ろんきゅー) 乳牛(にゅーぎゅー) 選擧(せんきょ) 根據(こんきょ)
3. 閑居(かんきょ) 隱居(いんきょ) 空虛(くーきょ) 孝經(こーきょー) 景況(けーきょー) 佛敎(ぶつきょー)
4. 發狂(はつきょー) 檢擧(けんきょ) 狀況(じょーきょー) 崩御(ほーぎょ) 金魚(きんぎょ) 人形(にんぎょー)
5. 印形(いんぎょー) 檢校(けんぎょー) 東京(とーきょー) 工業(こーぎょー) 農業(のーぎょー) 創業(そーぎょー)

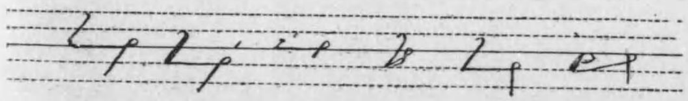
第二　は行屬略法

第五十九課

は行と其拗音との略法

或語の第二音が，はひふへほひゃひゅひょである時は，か行の通りにするが，又は略韻法によるのである。拗音は直立體を用ひて表はし，其例は略韻法で示す事にする。

黨派　號砲　應變　下附　好評　辭表



1. 硬派(こーは) 流派(りゅーは) 師範(しはん) 涅槃(ねはん) 寄附(きふ) 紙布(しふ)
2. 岐阜(ぎふ) 政府(せーふ) 初步(しょほ) 遊步(ゆーほ) 相方(そーほー) 謄本(とーほん)

3. 寫本(しやほん) 公報(こーはー) 資本(しほん) 見本(みほん) 日本(にほん) 雜兵(ぞーひよー)
4. 公平(こーへー) 舊弊(きゆーへー) 徵兵(ちよーへー) 横柄(おーへー) 精兵(せーへー) 急變(きゆーへん)
5. 商標(しよーひよー) 衆評(しゆーひよー) 風評(ふーひよー) 投票(とーひよー) 製氷(せーひよー) 豆腐(とーふ)

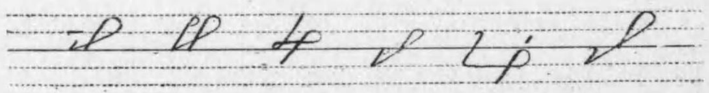
第三　や行略法

第六十課

や行の略法

或語の第二音がや行である時は，か行のやうにするか，又は略韻法によるかの二つで前課と同じである。例は後者の書方にする。

暗夜　早　靄　平癒　東洋　形容



1. 湯屋(ゆや) 艶(つや) 蚊帳(かや) 部屋(へや) 宮(みや) 終夜(しゆーや)
2. ホヤ 豪遊(ごーゆー) 桐油(とーゆ) 醬油(しよーゆ) 朋友(ほーゆー) 香油(こーゆ)
3. 英雄(えーゆー) 冬(ふゆ) 露(つゆ) 眉(まゆ) 舊友(きゆーゆー) 千代(ちよ)
4. 御代(ゆよ) 蟆子(ぶよ) 通用(つーよー) 同様(どーよー) 入用(にゆーよー) 太陽(たいよー)
5. 樞要(すーよー) 讓與(じよーよ) 修養(しゆーよー) 猶豫(ゆーよ) 公用(こーよー) 豐(とよ)

第四　た行屬略法

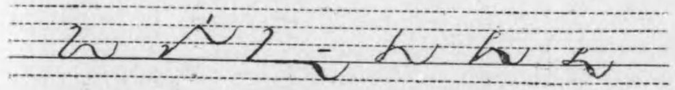
第二音がた行音の時は，第一音の母韻を波狀に變へ，つの時は其筆の尾を左にはね，ちゃちちゅちょの時は直立體を用ひるのである。

第六十一課

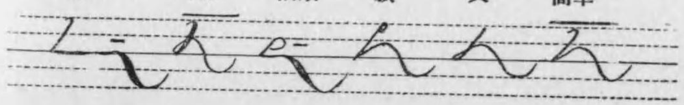
た行中段の略法

第二音のたてを表はすのが，中段の略法であつて，一階文字のての續け方は今迄のと同じであるが，二階文字の方は凡例に示すやうに，今迄のとは違つてゐる。

縱　兄弟　香典　待て　派手　筆



講談　萬端　油斷　旗　又　簡單



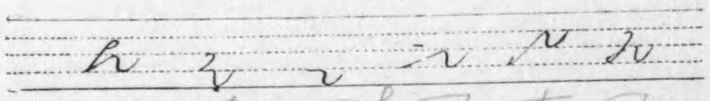
1. 商店(しよーてん) 法廷(はーてー) 宣傳(せんでん) 拘泥(こーでー) 運轉(うんてん) 宮殿(さゆーでん)

2. 南天(なんてん) 合點(がてん) 扨(さて) 果(はて) 以(もつて) 仕手(して)
3. 袖(そで) 未(まだ) 板(いた) 札(ふだ) 枝(えだ) 豚(ぶた)
4. 雪駄(せつた) 一端(いつたん) 戯談(じよーだん) 分擔(ぶんたん) 手段(しゆだん) 相談(そーだん)
5. 魂膽(こんたん) 發端(ほつたん) 判斷(はんだん) 政談(せーだん) 英斷(えーだん) 兵站(へーたん)

第六十二課

た行上段の略法

蜂　口　内　インチ　アーチ　パツチ

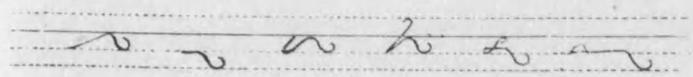


1. 市(いち) 道(みち) 吝(けち) 東風(こち) 此方(こつち) 町(まち)
2. 日(にち) 淵(ふち) 斑(ぶち) 鞭(むち) 埒(らち) 實地(じつち)
3. 丁稚(でつち) 文鎮(ぶんちん) ポンチ 風致(ふーち) 所置(しよち) 門地(もんち)
4. 太刀(たち) 勝(かも) 土(つち) 土地(とち) 落(おち) 幸(さち)

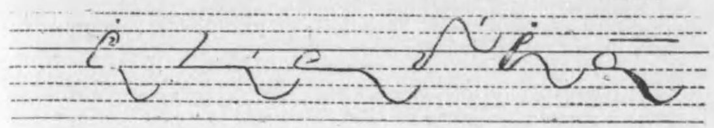
第六十三課

た行下段の略法

何時　打　熱　且　佛　流通



鳥渡　高等　舅　抵當　ザツト　倫敦



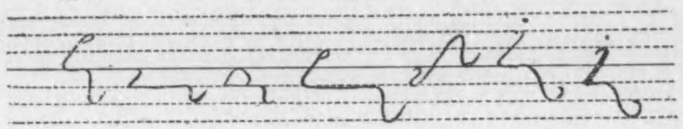
1. 悅(えつ) 骨(こつ) 節(せつ) 卒(そつ) 夏(なつ) 律(りつ)
2. 初(はつ) 待(まつ) 奴(やつ) 列(れつ) シヤツ 交通(こーつー)
3. 鳩(はと) 窓(まど) 淀(よど) 元(もと) 事(こと) 屹度(きつと)
4. 朋黨(ほーとー) 勞働(ろーどー) 丁度(ちよーど) 今度(こんど) 安堵(あんど) 封筒(ふーとー)
5. 雜沓(ぞつとー) 冥土(めーど) 整頓(せーとん) 上等(じよーとー) 平等(びよーどー) 教導(きよーどー)

第六十四課

た行拗音の略法

た行の拗音は，ちゃ，ち，ちゅ，ちょ，つぁ，つ，つぉ，であつて，ちとつとは直音中に説いたから，ここでは省く事にする。

粗茶　空中　旅中　鄭重　とっつあん　ごっつおー



1. 紅茶（こーちや）　製茶（せーちや）　銘茶（めーちや）　口中（こーちゆー）　集中（しゆーちゆー）　燒酎（しよーちゆー）
2. 道中（どーちゆー）　囊中（のーちゆー）　命中（めーちゆー）　躇躊（ちゆーちよ）　悠長（ゆーちよー）　縣廳（けんちよー）
3. 冗長（じよーちよー）　成長（せーちよー）　消長（しよーちよー）　增長（ぞーちよー）　疱丁（ほーちよー）　酋長（しゆーちよー）
4. 膨脹（ぼーちよー）　風潮（ふーちよー）　入超（にゆーちよー）　級長（きゆーちよー）　流暢（りゆーちよー）　議長（きちよー）

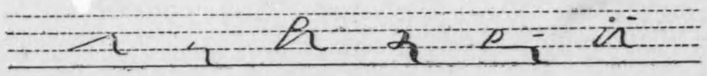
第五　さ行屬略法

第二音がさ行音の時は，第一音の母韻を波狀に變へ，其筆尾を　　のやうに引流すのである。

第六十五課

さ行上段の略法

石　押　椰子　無事　友人　熱心

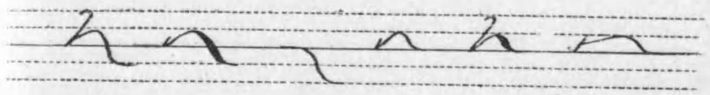


1. 鮨（すし）　岸（きし）　櫛（くし）　足（あし）　歲（とし）　西（にし）
2. 主（ぬし）　橋（はし）　節（ふし）　星（ほし）　梨（なし）　意地（いじ）
3. 木地（きじ）　虹（にじ）　臨時（りんじ）　檢事（けんじ）　雜誌（ぞつし）　有志（ゆーし）
4. 方針（ほーしん）　名人（めーじん）　療治（りよーじ）　寫眞（しやしん）　必死（ひつし）　給仕（きゆーじ）

第六十六課

さ行中段の略法

笠　痣　宇佐　汗　風　店

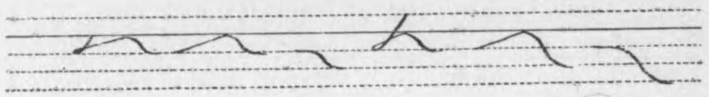


1. 朝（あさ）　柾（まさ）　土佐（とさ）　今朝（けさ）　蓙（ござ）　餌（えさ）
2. 業（わざ）　膝（ひざ）　幣（ぬさ）　閑散（かんさん）　檢査（けんさ）　筆算（ひつさん）
3. 所作（しよさ）　降參（ごーざん）　銀山（ぎんざん）　賞讃（しよーさん）　調査（ちよーさ）　物產（ぶつさん）
4. 癖（くせ）　ガーゼ　瞽女（ごぜ）　何故（なぜ）　沙魚（はぜ）　安全（あんぜん）
5. 脫線（だつせん）　修繕（しゆーぜん）　出世（しつせ）　偶然（ぐーぜん）　冷靜（れーせー）　伊勢（いせ）

第六十七課

さ行下段の略法

簾　椅子　白　鱒　磯　虚言



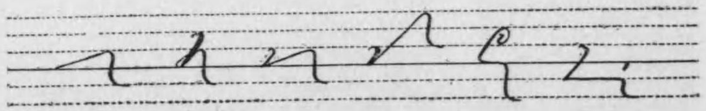
1. 水　筈　蓮　數　瓦斯　樣子
2. 茄子　柚子　留守　葛　上手　方寸
3. 餘所　謎　謙遜　本尊　質素　競爭
4. 構造　貞操　思想　想像　眞相　新造

第六十八課

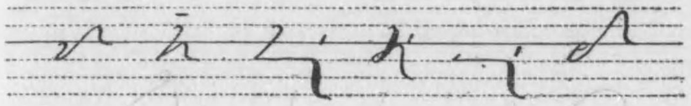
さ行拗音の略法

さ行の拗音は しゃ, し, しゅ, しょ, じゃ, じ, じゅ, じょ, で, しじは直音中に掲げたから, ここでは其外のを一括して示さう。

醫者　馬車　記者　藝者　著者　講習



亭主　看守　口上　芭蕉　往生　清書



1. 電車　取捨　花車　本社　列車　夜叉
2. 風習　聽衆　九州　上旬　乳臭　擧手
3. 乳汁　講中　報酬　世襲　禁酒　銘酒
4. 高尙　强情　奏上　投書　同情　愁傷
5. 令孃　氣象　近所　勘定　貞女　中將

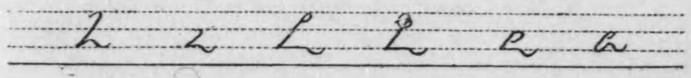
第六　ら行屬略法

ら行音を省くのには, 母韻を半階の波狀線に變へ, ら,ろは廣く, り,る,れは狹く開くのである。

第六十九課

ら行上段の略法

雁　栗　堀　距離　百合　芹

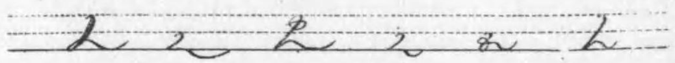


1. 桐(きり) 針(はり) 鳥(とり) 緣(へり) 橇(そり) 借(かり)
2. 森(もり) 槍(やり) 振(ふり) 毬(まり) 釣(つり) 地理(ちり)
3. 無理(むり) 近隣(きんりん) 人倫(じんりん) 深林(しんりん) 鰤(ぶり) 掏摸(すり)

第七十課

ら行中段の略法

薔薇　藏　伽羅　暮　連　關聯

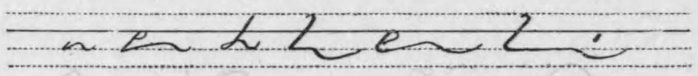


1. 虎(とら) 更(さら) 寺(てら) 面(つら) 奈良(なら) 紊亂(びんらん)
2. 橄欖(かんらん) 鷄卵(けーらん) 縱覽(じゅーらん) 團欒(だんらん) 氾濫(はんらん) 村(むら)
3. 誰(たれ) 夫(それ) 我(われ) 鍛煉(たんれん) 伉儷(こーれー) 調練(ちょーれん)
4. 通例(つーれー) 虛禮(きょれー) 奬勵(しょーれー) 政令(せーれー) 敬禮(けーれー) 答禮(とーれー)

第七十一課

ら行下段の略法

或　晝　丸　頃　城　燈籠

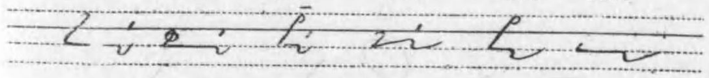


1. 蹴(ける) 凝(ごる) 笊(ざる) 剃(そる) 磨(する) 汁(しる)
2. 春(はる) 降(ふる) 遣(やる) 夜(よる) 通(とーる) 投(ほーる)
3. 黑(くろ) 母衣(ほろ) 風呂(ふろ) 泥(どろ) 通路(つーろ) 崑論(こんろん)
4. 輿論(よろん) 道路(どーろ) 長老(ちょーろー) 香爐(こーろ) 如露(じょろ) 爭論(そーろん)

第七十二課

ら行拗音の略法

逗留　急流　奔流　氣量　捕虜　横領



1. 風流(ふーりゅー) 拘留(こーりゅー) 漂流(ひょーりゅー) 上流(じょーりゅー) 中流(ちゅーりゅー) 下流(かーりゅー)
2. 神慮(しんりょ) 羈旅(きりょ) 伴侶(はんりょ) 治療(ちりょー) 肥料(ひりょー) 給料(きゅーりょー)
3. 惣領(そーりょー) 統領(とーりょー) 納凉(のーりょー) 明瞭(めーりょー) 遊獵(ゆーりょー) 官僚(かんりょー)

第七　な行屬略法

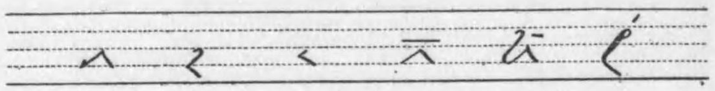
第二音がな行音である時は，右向の斜線＼＼のどちらかを用ひる。うおの母韻の後と，うおの母韻をもつ成熟音の後とに，なにぬね

のが續く時は，母韻夫れ自身を斜に記し，にゃ行には彎曲の直立體を用ひる。

第七十三課

な行上段の略法

兄　國　鬼　延引　他人　雑煮

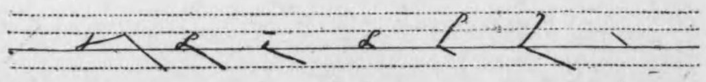


1. 鰐（わに）　谷（たに）　何（なに）　蟹（かに）　紅（べに）　海栗（うに）
2. 錢（ぜに）　信任（しんにん）　仙人（せんにん）　仲人（ちゅーにん）　商人（しょーにん）　藝人（げーにん）
3. 凡人（ぼぃにん）　證人（しょーにん）　當人（とーにん）　放任（ほーにん）　浪人（ろーにん）　用人（よーにん）

第七十四課

な行中段の略法

皆　鯖　女　船　骨　粉　畦（うね）



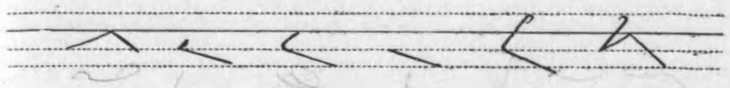
1. 綱（つな）　品（しな）　花（はな）　雛（ひな）　穴（あな）　困難（こんなん）

2. 銀杏（ぎんなん）　旦那（だんな）　後難（こーなん）　劍難（けんなん）　京菜（きょーな）　盜難（とーなん）
3. 姉（あね）　稻（いね）　金（かね）　羽根（はね）　峰（みね）　屋根（やね）
4. 遠音（とーね）　殘念（ざんねん）　丁寧（てーねー）　延年（えんねん）　存念（ぞんねん）　明年（みょーねん）

第七十五課

な行下段の略法

犬　斧　布　字野　其　彼



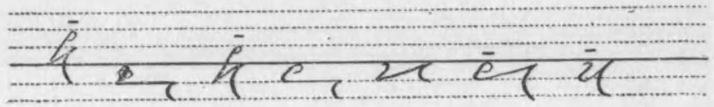
1. 絹（きぬ）　茅渟（ちぬ）　死（しぬ）　見（みぬ）　彼（かの）　觀音（かんのん）
2. 此（この）　効能（こーのー）　角（つの）　殿（との）　焰（ほのー）　捧納（ほーのー）
3. 者（もの）　簑（あの）　佐野（さの）　日野（ひの）　こぬ　まぬ

第七十六課

な行拗音の略法

にゃ行は甚だ少ないから，練習例題は省く事にする。

磐若　牛乳　班女　收入　記入　眞如　天女



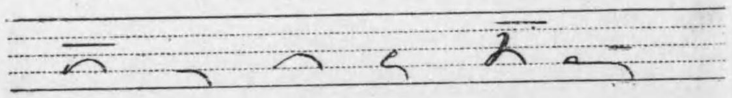
第八　ま行屬略法

第二音がま行音なる時は，第一音の母韻を彎曲するのみで，みゃ行には其直立體を用ひるのである。さうして此ま行には必ず彎曲體をつかひ，略韻法は用ひぬ事にする。

第七十七課

ま行上段の略法

安眠　海　笑　墨　蠻民　流民

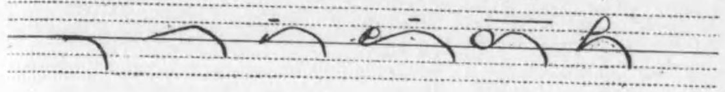


1. 意味（いみ）　紙（かみ）　君（きみ）　蟬（せみ）　民（たみ）　地味（ちみ）
2. 罪（つみ）　富（とみ）　波（なみ）　文（ふみ）　闇（やみ）　弓（ゆみ）
3. 珍味（ちんみ）　近江（おーみ）　趣味（しゅみ）　窮民（きゅーみん）　興味（きょーみ）　憐愍（れんみん）

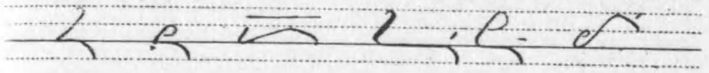
第七十八課

ま行中段の略法

馬　今　按摩　自慢　爛熟　山



米　夢　任免　同盟　書面　生命

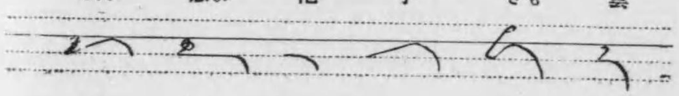


1. 尼（あま）　鎌（かま）　妻（つま）　様（さま）　濱（はま）　我慢（がまん）
2. 閻魔（えんま）　充滿（じゅーまん）　頓間（とんま）　土間（どま）　傳馬（てんま）　高慢（こーまん）
3. 雨（あめ）　梅（うめ）　姫（ひめ）　駄目（だめ）　豆（まめ）　有名（ゆーめー）
4. 長命（ちょーめー）　新芽（しんめ）　帳面（ちょーめん）　放免（はーめん）　虚名（きょめー）　表面（ひょーめん）

第七十九課

ま行下段の略法

義務　急務　倦　芋　さも　雲



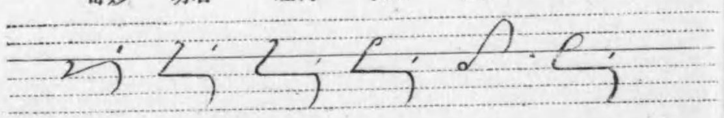
1. 專務(せんむ)　庶務(しょむ)　公務(こーむ)　編(あむ)　忌(いむ)　噛(かむ)
2. 煙(けむ)　酌(くむ)　積(つむ)　富(とむ)　踏(ふむ)　鴨(かも)
3. 膽(きも)　霜(しも)　そも　友(とも)　紐(ひも)　鱧(はも)

第八十課

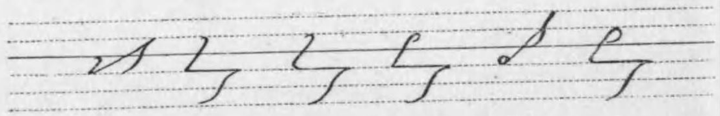
ま行拗音の略法

にゃ行同様極めて少ないから，練習題は省く事にする。

奇妙　功名　燈明　法名　靈妙　稱名



みゃ行は略韻法にて書き得られる。



第九　ぱ行屬略法

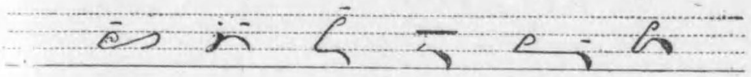
は行を省くのには，ま行と同じく彎曲體に

しても，略韻法にしても隨意であるが，間違の起る恐のある時だけ，略韻法を用ふるがよい。

第八十一課

は行上段の略法

陣皮　別品　村費　穩便　郵便　錆

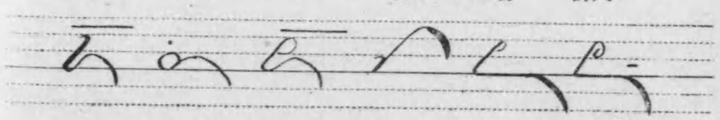


1. 突飛(とっぴ)　法被(はっぴ)　三一(さんぴん)　前非(ぜんぴ)　天日(てんぴ)　面皮(めんぴ)
2. 一品(いっぴん)　實費(じっぴ)　出品(しっぴん)　珍品(ちんぴん)　人品(じんぴん)　安否(あんぴ)
3. 鳶(とび)　旅(たび)　蛇(へび)　詫(わび)　帶(おび)　媚(こび)
4. 天秤(てんびん)　賞美(じょーび)　準備(じゅんび)　輕微(けーび)　豫備(よび)　黍(きび)

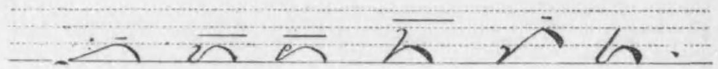
第八十二課

は行中段の略法

談判　喇叭　シャンパン　競馬　相場　評判



一片　天變　顚々　勘辨　輕便　鍋

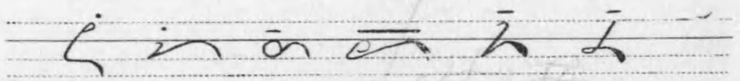


1.	新版 しんぱん	分派 ぶんぱ	偏頗 へんぱ	一般 いつぱん	活版 かつぱん	血判 けつぱん
2.	立派 りつぱ	先般 せんぱん	河童 かつぱ	說破 せつぱ	紋羽 もんぱ	木端 こつぱ
3.	牙 きば	乳母 うば	伯母 おば	樺 かば	芝 しば	檜葉 ひば
4.	驢馬 ろば	帳場 ちやーば	明晩 みやーばん	娑婆 しやば	當番 とーばん	獵場 りやーば
5.	緣邊 えんぺん	近邊 きんぺん	天邊 てんぺん	半片 はんぺん	民兵 みんぺー	新編 しんぺん
6.	壁 かべ	勤勉 きんべん	通辨 つーべん	神戶 こーべ	夕 ゆーべ	鮸 にべ

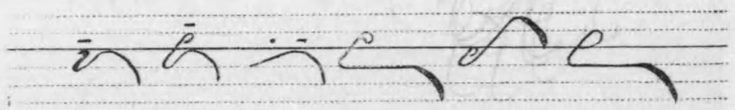
第八十三課

は行下段の略法

ソツプ　切符　ランプ　新聞　幹部　文部



電報　散步　一本　帳簿　歲暮　消防



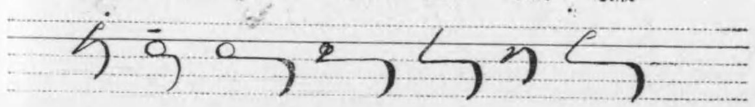
1.	金粉 きんぷん	月賦 げつぷ	三府 さんぷ	絹布 けんぷ	陳腐 ちんぷ	澱粉 でんぷん
2.	天賦 てんぷ	實父 じつぷ	コツプ	匹夫 ひつぷ	濕布 しつぷ	節婦 せつぷ
3.	勝負 しやーぶ	散文 さんぶん	人夫 にんぷ	半分 はんぶん	性分 しやーぶん	十分 じゆーぶん
4.	藪 やぶ	飛 とぶ	延 のぶ	風聞 ふーぶん	虻 あぶ	澁 しぶ
5.	憲法 けんぽー	探訪 たんぽー	根本 こんぽん	鼈 すつぽん	シヤポン	日本 につぽん
5.	聾 つんぼ	矮雞 ちやぼ	女房 によーぼー	蜻蛉 とんぼ	繼母 けーぼ	渺茫 びよーぼー

第八十四課

は行拗音の略法

は行の拗音は，びゃ，びゅ，びょ，びゃ，びゅ，びょ であつて，其數が少ないから練習題は省く事にする。

發表　論評　老病　急病　腦病　假病　宗廟



第十　わ行略法

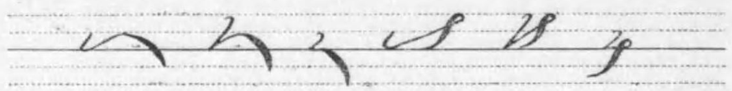
わ行はま行と同じく彎曲體を用ひてよく，

略韻法でも差支はない。わ行には一の特例があつて，半階の半圓符へを獨立に書いて互爾乎波のわとする。

第八十五課

わ行の略法

にわ　かわ　くわ　にわ　かわ　くわ



始の三語はにはかはくはとも讀め，兩者共通であつて，單獨で明瞭に表はさうとするには，後の方の略韻法でなければならぬが，これを談話文章中に用ふれば，前後の關係上間違は起らぬのである。假令ば夫にわ（にば）及びませぬ，かわ（かば）の流が早い，わく（くば）しく分る等一目瞭然，上のやうに讀まねばなるまい。どちらか分らぬ場合には略韻法を用ひるのである。

1. 懇話（こんわ）　談話（だんわ）　穩和（おんわ）　柔和（にーわ）　茶碗（ちやわん）　平和（へーわ）

2. 三輪（みわ）　岩（いわ）　際（きわ）　世話（せわ）　皺（しわ）　諏訪（すわ）
3. 縄（なわ）　粟（あわ）　澤（さわ）　茶話（ちやわ）　鶸（ひわ）　講和（こーわ）

二音語の略法はこれで終つたが，連絡上から推定し得られる場合は，すべてか行の如く扱つて，第二音を省いて差支はない。かう云ふと或は初學者は了解し得ないかも知れないが，此處で分らぬとしても，三音四音と進んで行くうちには，自然と分つてくる。

第四節

三音語略法

三音語を略するには次の三通りを用ひる。

甲．其第三音を二音語同樣に扱ふもの。

乙．第三音を無いものとして，二音語と等しく扱ふもの。

丙．第一音と第三音とを書き，第二音を省くもの。

以上三通に分けたとはいへ，何れを用ひて

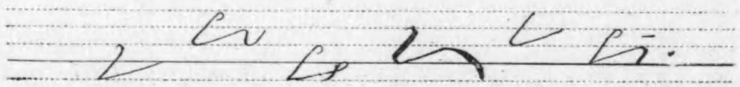
も差支はない。かう説明すると混雜するやうに見えるが，實際は簡單である。順を逐つて其例を示さう。

第八十六課

三音語特別略法

三音語中に，**あい**，**かい**，**さい**，**たい**，**ない**，**はい**，**まい**，**やい**，**らい**，**わい**，**ばい**，**ぱい**の諸音がある時は，三音とはいへ，速記文字では二字形であるから，二音語の略し方と同じやうにしてよろしい。

蠶　才智　配付　臺場　內儀　拜見

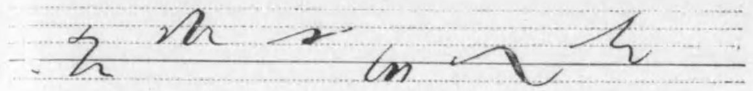


1. 會議（かいぎ）　會計（かいけー）　最期（さいご）　太鼓（たいこ）　大工（だいく）　迷兒（まいご）
2. 舞子（まいこ）　改正（かいせー）　開祖（かいそ）　大使（たいし）　解散（かいさん）　內所（ないしよ）
3. 再度（さいど）　怠惰（たいだ）　財布（さいふ）　大破（たいは）　退歩（たいは）　ナイフ
4. ワイフ　內部（ないぶ）　賣店（ばいてん）　毎夜（まいよ）　代參（だいさん）　開化（かいか）

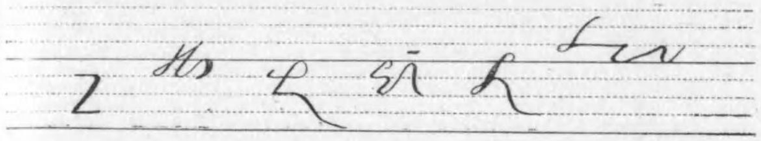
第八十七課

三音語略法の甲式

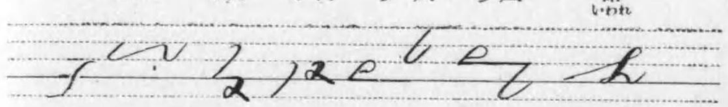
昔　蓋　鮮　嘆く　問　命



動く　學ぶ　凡　ステーション　噂　明日



明日　小舟　小舟　夕風　夕風　謂（いわれ）

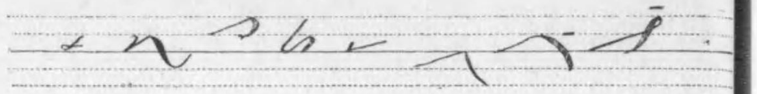


1. 僅（わずか）　試（ためし）　然（しかり）　延（のばす）　爲替（かわせ）　烏帽子（えぼし）
2. ピアノ　遊（あそぶ）　叫（さけび）　靨（えくぼ）　尊（たつとぶ）　鰻（うなぎ）
3. のべつ　粗食（そしよく）　土產（みやげ）　選（えらぶ）　胡桃（くるみ）　懇（ねんごろ）
4. 隧道（とんねる）　喋（しやべる）　淡泊（あつさり）　ぼんやり　はつきり　のんびり

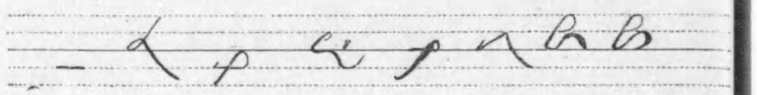
第八十八課

三音語略法の乙式

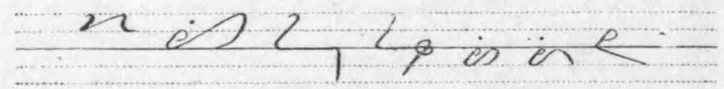
昔　蓋　鮮　嘆き　間　命　況や　況や



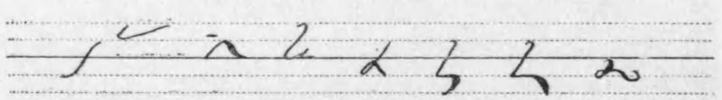
動く　學ぶ　及　ステーション　噂　貴君　喋る　喋る



儀式　失敗　當局　當局　切腹　切腹　夕風



明日　演説　田植　間抜　小舟　小舟　物議



〆は次にかの略してある事は，か行略音法の規則通りであるが，これも迎い迎え向いと讀まれるので，談話の聯絡を考えねばならぬ。併し話を聞きながら連絡を考えるといふのは，或は無理と思ふかも知れぬが，此呼吸は熟練から得られるので，始の中は讀易いのを主と

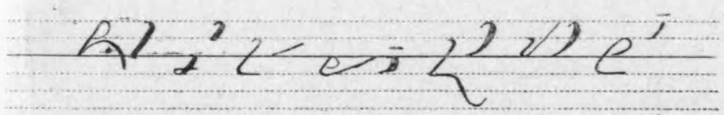
するがよろしい。

1. 教(おしえ)　費(ついえ)　榮(さかえ)　答(こたえ)　迷(まよい)　芽生(めばえ)
2. 鼎(かなえ)　手抜(てぬき)　牛肉(ぎゅーにく)　計略(けーりゃく)　見識(けんしき)　直先(まつさき)
3. 强弱(きょーじゃく)　注目(ちゅーもく)　窮策(きゅーさく)　手癖(てくせ)　茶店(ちゃみせ)　仕業(しわざ)
4. 身持(みもち)　手品(てじな)　故實(こじつ)　念佛(ねんぶつ)　中立(ちゅーりつ)　日延(ひのべ)
5. 生蕎麥(きそば)　夜業(よなべ)　日暮(ひぐれ)　順繰(しゅんぐり)　精密(せーみつ)　遠廻(とーまーし)
6. 飾(かざる)　あつさり　隧道(とんねる)　のんびり　ピアノ　遊(あそぶ)

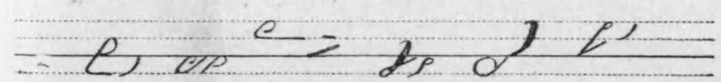
第八十九課

三音語略法の丙式

山家　物議　得意　祝文　言葉　停車場　植民



職務　説論　衆議院　幕府　落馬　花見



1. 曲馬(きょくば)　歌舞伎(かぶき)　惡意(あくい)　十字架(じゅーじか)　鼻毛(はなげ)　藪蚊(やぶか)
2. 役者(やくしゃ)　社務所(しゃむしょ)　借錢(しゃくせん)　活字(かつじ)　雨戸(あまど)　酒手(さかて)

3. 落度（おちど）　三味線（しやみせん）　花火（はなび）　市場（いちば）　海邊（うみべ）　濱邊（はまべ）
4. 闇夜（やみよ）　卽坐（そくざ）　慾目（よくめ）　奥歯（おくば）　牧師（ぼくし）　指輪（ゆびわ）

第五節

四音語略法

四音語の略法は次の四通である。

甲. 四音語を二音宛に分割して，二音語の略法に從ふもの。

乙. 第一第二第三音を記し，第四音を省くもの。

丙. 第二音か又は第二第三音を省き，第四音を記すもの。

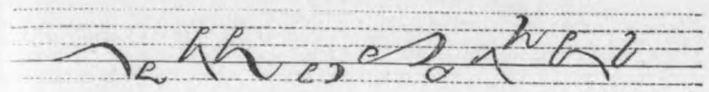
丁. 最初の二音のみを記し，後の二音を省くもの。

以上の四種，何れを適用してもよろしいが，例としては各別に示す事にする。

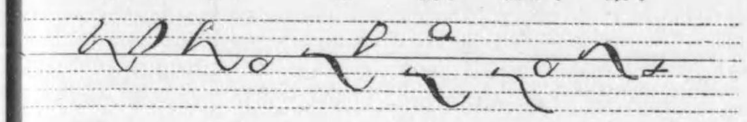
第九十課

四音語略法の甲式

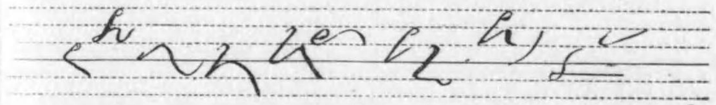
所謂　甚　頗る　暫く　强ち　妨



例へば　働く　穩　驚き　恐らく　欺く



卽　恰　樂しみ　捗る　始まり　明後日

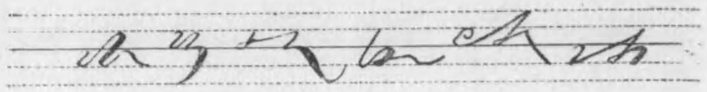


1. 勢（いきおい）　陸續（りくぞく）　蒲燒（かばやき）　丸髷（まるまげ）　取消（とりけし）　株主（かぶぬし）
2. 焚出（たきだし）　夏瘠（なつやせ）　秋風（あきかぜ）　波風（なみかぜ）　誤（あやまり）　過（あやまち）
3. 少なく（すく）　引札（ひきふだ）　親方（おやかた）　成程（なるほど）　友達（ともだち）　開札（かいさつ）
4. 米櫃（こめびつ）　特別（とくべつ）　如何にも（いか）　羨（うらやむ）　高野豆腐（こーやどーふ）　曙（あけぼの）
5. 横文字（よこもじ）　調査會（ちよーさかい）　とぼける　流行感冒（りゆーこーかんぼー）　貧る（むさぼ）　片假名（かたかな）

第九十一課

四音語略法の乙式

手助　手配　見下す　名廣め　血眼　氣紛れ

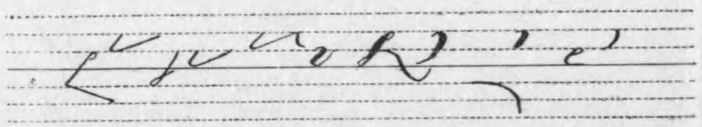


1. 小肴（こざかな）　葉櫻（はざくら）　夜明（よあかし）　氣短（きみじか）　見送（みおくり）　遠眼鏡（とーめがね）
2. 茶袋（ちやぶくろ）　見放（みはなす）　手細工（てざいく）　手答（てごたえ）　手仕事（てしごと）　御不沙汰（ごぶさた）
3. 手焙（てあぶり）　手踊（ておどり）　手探（てさぐり）　日暮（ひぐらし）　胃袋（いぶくろ）　大廣間（おーひろま）
4. 目配（めくばせ）　盆踊（ぼんおどり）　段梯子（だんばしご）　禮參（れいまいり）　大八洲（おーやしま）　腸チブス（ちよー）
5. 手枕（てまくら）　荷車（にぐるま）　氣休（きやすめ）　戸袋（とぶくろ）　見殺（みごろし）　陣太鼓（じんだいこ）

第九十二課

四音語略法の丙式

仄に　誠に　錦手　渡場　埋木　姿見



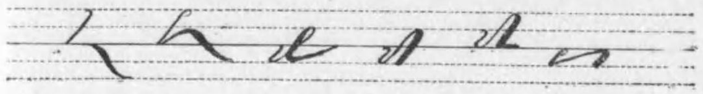
1. 孤兒（みなしご）　怪火（あやしび）　柏手（かしわで）　佃煮（つくだに）　東屋（あずまや）　寫繪（うつしえ）
2. 讓葉（ゆずりは）　油繪（あぶらえ）　藥湯（くすりゆ）　旅籠屋（はたごや）　思出（おもいで）　替目（かわりめ）

第九十三課

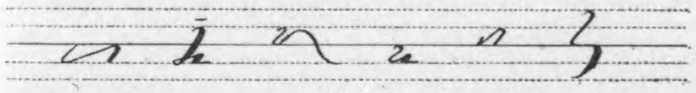
四音語略法の丁式

甲式に掲けた所謂以下，恰もまでの十四語と，乙式の大部分は，此丁式によつて書く事が出來る。

小肴　葉櫻　手細工　手答　手答　日暮



荷車　盆踊　手探　手踊　曙　とぼける



1. 所謂（いわゆる）　甚（はなはだ）　頗（すこぶる）　強ち（あながち）　暫（しばらく）　妨（さまたげ）
2. 例ば（たとえ）　働（はたらく）　穏（おだやか）　驚（おどろく）　恐（おそらく）　欺（あざむき）
3. 卽（すなわち）　恰（あたかも）　營（いとなみ）　羨（うらやむ）　捗（はかどる）　貪（むさぼる）
4. 手配（てくばり）　名廣（なびろめ）　血眼（ちまなこ）　氣紛（きまぐれ）　氣短（きみじか）　見送（みおくり）
5. 見放（みはなす）　手焙（てあぶり）　目配（めくばせ）　氣休（きやすめ）　目藥（めぐすり）　交（まじわり）

第六節

五音語略法

五音語略法は次の四通りに分ける。

甲. 二音語と三音語とに分割して，夫々の略法に從ふもの。

乙. 三音語と二音語とに分割して，夫々の略法に從ふもの。

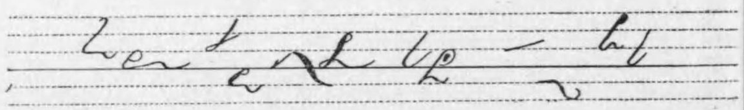
丙. 始と終との幾音かを記すもの。併し中間に，のがの接續詞ある時は，必ずこれを記す事とする。

丁. 始の一二音を記して他を省くもの。

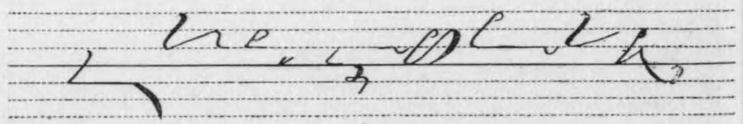
第九十四課

五音語略法の甲式

取調　卷鰐　嘲笑　中休　生寫　乍去



弘法大師　雪明　棟袋　賣捌　總理大臣　花曇

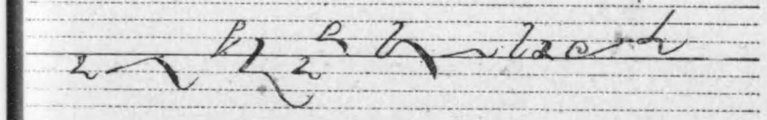


1. 勝軍（かちいくさ）　店卸（たなおろし）　厄落（やくおとし）　打合（うちあわせ）　埋合（うめあわせ）　犬張子（いぬはりこ）
2. 山嵐（やまあらし）　店開（みせびらき）　胸騷（むなさわぎ）　品定（しなさだめ）　琉球紬（りゅーきゅーつむぎ）　小間使（こまずかい）
3. 雨曝（あまざらし）　輕率（かるはずみ）　食中（しょくあたり）　奉書紬（ほーしょーつむぎ）　馬鹿囃（ばかはやし）　廻舞臺（まーわぶたい）
4. 猿轡（さるぐつわ）　行倒（ゆきだおれ）　物語（ものがたり）　宿下（やどさがり）　膝枕（ひざまくら）　藪睨（やぶにらみ）
5. 濡鼠（ぬれねずみ）　燒肴（やきざかな）　寺參（てらまいり）　足搦（あしがらみ）　肺結核（はいけつかく）　貝細工（かいざいく）
6. 人殺（ひとごろし）　歌袋（うたぶくろ）　口車（くちぐるま）　空也念佛（くーやねんぶつ）　下咄（したはなし）　蟲眼鏡（むしめがね）

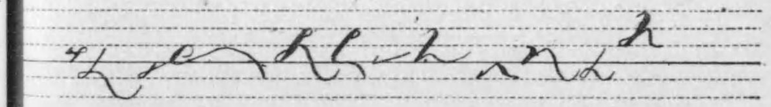
第九十五課

五音語略法の乙式

車井戸　謀　藥指　蔑入　寶舟　力餅



お膝元　盲縞　渡始（わたりそめ）　間柄　東下駄　丸木橋



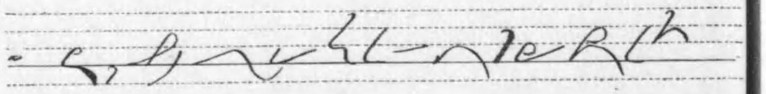
1. 獨言（ひとりごと）　政事（まつりごと）　車寄（くるまよせ）　仇討（かたきうち）　田植歌（たうえうた）　鶯宿梅（おーしくはい）

2. 鰹節（かつおぶし） 命乞（いのちごい） 肴賣（さかなうり） 柳樽（やなぎだる） 公沙汰（おーやけざた） 雲齋織（うんさいおり）
3. 渡舟（わたしぶね） 後戻（あともどり） 梓弓（あづさゆみ） 花筏（はないかだ） 進水式（しんすいしき） 吉野山（よしのやま）
4. 笑草（わらいぐさ） 力瘤（ちからこぶ） 風車（かざぐるま） 都鳥（みやことり） 紋切形（もんきりがた） 繪虚事（えそらごと）
5. 思入（おもいいれ） 蜻蛉返（とんぼがへり） 三階松（さんがいまつ） 岩田帶（いわたおび） 言葉尻（ことばじり） 五目鮨（ごもくずし）

第九十六課

五音語略法の丙式

須く　苟も　徒に　年の市　天が下　山の神

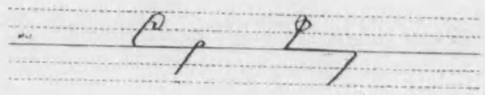


1. 惟るに（おもんみ） 思らく（おもえ） 疎に（おろそか） 徐に（おもむろ） 願くば（ねがわ）
2. 松の内（まつうち） 幕の内（まくうち） 後の月（のちつき） 竹の節（たけふし） 息の下（いきした）
3. 舟の中（ふねなか） 火の車（ひくるま） 智慧の板（ちえいた） 三途の川（さんずかわ） 溜の間（たまりま）
4. 左馬頭（さまのかみ） 石の橋（いしばし） 以ての外（もつてほか） 女護の嶋（にょーごしま） 山の奥（やまおく）

第九十七課

五音語略法の丁式

蝶花形　經帷子



1. 玉蜀黍（とーもろこし） 大晦日（おーみそか） 詳（つまびらか） ジプテリヤ マグネシヤ
2. 金唐革（きんからかわ） 歌かるた（うた） 須く（すべから） 傍若無人（はーじゃくぶじん）

第九十八課

六音語七音語の略法

略音法は，二音語と三音語との略法に通ずれば，他は推量し得られる事は前に說いたが，初學のために四五音に對する凡例を示したのである。六七音語は悉く組合せて出來たものであるから，練習題だけにしておく。初學の中は讀易いのを主とする方がよいから，一語を分割し夫々の法則に從つて，省略を試みるがよろしい。

1. 葵祭（あおいまつり） 今坂餅（いまさかもち） 機織蟲（はたおりむし） 網乘物（あみのりもの） 天津日嗣（あまつひつぎ）
2. 落噺（おとしばなし） 波打際（なみうちぎわ） 松川菱（まつかわびし） 猫撫聲（ねこなでごえ） 株式會社（かぶしきかいしゃ）

3. 握拳（にぎりこぶし） 振分髪（ゝりわけがみ） 百日咳（ひやくにちぜき） 我物顔（わがものがお） 特別委員（とくべつい いん）
4. 力落（ちからおとし） 花咲爺（はなさきじじー） 襟白粉（えりおしろい） 江戸紫（えどむらさき） 讀會省略（どつかいーせーりやく）
5. 命拾（いのちびろい） 若年寄（わかどしより） 鴨川染（かもがわぞめ） 錄盜人（ろくぬすびと） 淺草海苔（あさくさのり）
6. 賢所（かしこどころ） 鬢附油（びんつけあぶら） 氣狂水（きちがいみず） 大和魂（やまとだましー） 河原撫子（かわらなでしこ）
7. 朧月夜（おぼろづきよ） 出合頭（であいがしら） 吉野櫻（よしのざくら） 火見櫓（ひのみやぐら） 第一讀會（だいいちどつかい）
8. 不問語（とわずがたり） 鹿子絞（かのこしぼり） 枝垂柳（しだれやなぎ） 五目並（ごもくならべ） 縣會議事堂（けんかいぎ じ どー）
9. 寶の山（たから やま） 月の光（つき ひかり） 鐘の響（かね ひびき） 思の外（おもひ ほか） 百度詣（ひやくどまいり）
10. 天浮橋（あまのうきはし） 忘形見（わすれがたみ） 薩摩絣（さつまがすり） 米澤紬（よねざわつむぎ） 電氣の明（でんき あかり）
11. 小櫻縅（こざくらおどし） 大八車（だいはちぐるま） 百物語（ひやくものがたり） 思廻らす（おもいめぐ） 商業會議所（しよーぎよーかいぎしよ）
12. 高天原（たかまがはら） 竹子笠（たけのこかさ） 鎖帷子（くさりかたびら） 襠高袴（まちだかはかま） 特別委員長（とくべついいんちよー）

第十四章

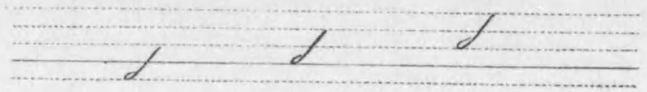
特　別　略　法

特別略法とは，談話中最も必要な助動詞(其他二三の語)の綴を縮めるもので，略韻略音兩法を應用するのである。

第九十九課

ます，ませぬの略法

ます　します　　ませぬ　しませぬ　　ました　しました



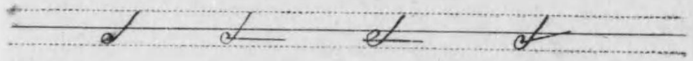
以上の三字が助動詞の基礎であつて，これを種々に變化して，他の助動詞を作るのである。

1. 學びます　歸ります　笑います　飛びます
2. 速記します　當惑します　衝突します　運動します
3. 行きました　止めました　休みました　嘆きました
4. 歡迎しました　同情しました　及第しました　奔走しました
5. 讀みませぬ　書きませぬ　教えませぬ　防ぎませぬ
6. 掲載しませぬ　議論しませぬ　反對しませぬ　飜譯しませぬ

第　百　課

ますの變化

ます　しまする　　ませう　しませう　　ますでせう　しますでせう　　ますまい　しますまい



1. 書きまする　始めまする　飲みまする　遣りまする
書きませう　始めませう　飲みませう　遣りませう
書きますでせう　始めますでせう　飲みますでせう　遣りますでせう
書きますまい　始めますまい　飲みますまい　遣りますまい

2. 喜びまする　踊りまする　育てまする　敎へまする
喜びませう　踊りませう　育てませう　敎えませう
喜びますでせう　踊りますでせう　育てますでせう　敎えますでせう
喜びますまい　踊りますまい　育てますまい　敎えますまい

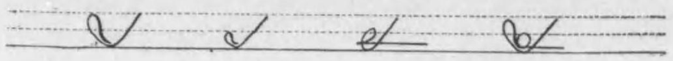
3. 賞讃しまする　歡迎しまする　請求しまする　亂暴しまする
賞讃しませう　歡迎しませう　請求しませう　亂暴しませう
賞讃しますでせう　歡迎しますでせう　請求しますでせう　亂暴しますでせう
賞讃しますまい　歡迎しますまい　請求しますまい　亂暴しますまい

4. 發表しまする　賛成しまする　散歩しまする　回復しまする
發表しませう　賛成しませう　散歩しませう　回復しませう
發表しますでせう　賛成しますでせう　散歩しますでせう　回復しますでせう
發表しますまい　賛成しますまい　散歩しますまい　回復しますまい

第百一課

ませぬの變化

ませぬでした　ませぬでして　ませぬでせう　ませぬでしたらう
しませぬでした　しませぬでして　しませぬでせう　しませぬでしたらう



1. 降りませぬでした　運びませぬでした　答えませぬでした　訴へませぬでした
降りませぬでして　運びませぬでして　答えませぬでして　訴へませぬでして
降りませぬでせう　運びませぬでせう　答えませぬでせう　訴へませぬでせう
降りませんでしたらう　運びませんでしたらう　答えませんでしたらう　訴へませんでしたらう

2. 遊びませぬでした　咲きませぬでした　晴れませぬでした　集りませぬでした
遊びませぬでして　咲きませぬでして　晴れませぬでして　集りませぬでして
遊びませぬでせう　咲きませぬでせう　晴れませぬでせう　集りませぬでせう
遊びませぬでしたらう　咲きませぬでしたらう　晴れませぬでしたらう　集りませぬでしたらう

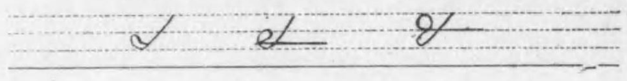
3. 喝采しませぬでした　承諾しませぬでした　逗留しませぬでした　投票しませぬでした
喝采しませぬでして　承諾しませぬでして　逗留しませぬでして　投票しませぬでして
喝采しませぬでせう　承諾しませぬでせう　逗留しませぬでせう　投票しませぬでせう
喝采しませぬでしたらう　承諾しませぬでしたらう　逗留しませぬでしたらう　投票しませぬでしたらう

4. 決議しませぬでした　演說しませぬでした　滿足しませぬでした　勸誘しませぬでした
決議しませぬでして　演說しませぬでして　滿足しませぬでして　勸誘しませぬでして
決議しませぬでせう　演說しませぬでせう　滿足しませぬでせう　勸誘しませぬでせう
決議しませぬでしたらう　演說しませぬでしたらう　滿足しませぬでしたらう　勸誘しませぬでしたらう

第百二課

ましたの變化

まして　ましたでせう　ましたらう
しまして　しましたでせう　しましたらう



1. 痛みまして　駈けまして　與へまして　試みまして

痛みましたでせう　駈けましたでせう　與へましたでせう　試みましたでせう

痛みましたらう　駈けましたらう　與へましたらう　試みましたらう

2. 破りまして　數へまして　守りまして　攻めまして

破りましたでせう　數へましたでせう　守りましたでせう　攻めましたでせう

破りましたらう　數へましたらう　守りましたらう　攻めましたらう

3. 演說しまして　賣出しまして　入札しまして　記憶しまして

演說しましたでせう　賣出しましたでせう　入札しましたでせう　記憶しましたでせう

演說しましたらう　賣出しましたらう　入札しましたらう　記憶しましたらう

4. 割引しまして　回復しまして　散會しまして　降參しまして

割引しましたでせう　回復しましたでせう　散會しましたでせう　降參しましたでせう

割引しましたらう　回復しましたらう　散會しましたらう　降參しましたらう

第百三課

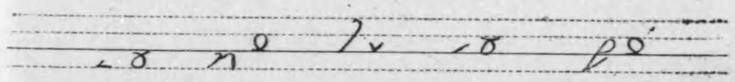
られらるの變化

らるに關するすべての助動詞記號は，位置に關係なく，何れの場所にも書き得られ，其圓形は圓のある事が分ればよいので，圓の形についての條件はない。さうして運筆上の支障なく，他の字と紛れぬ場合は，前の字と續けてよろしいが，其中間に略されたる音がある時は，必ず離して書くのである。

らる　らる、　られ　られる　らるれ　れる　る、　るれ
せらる　せらる、　せられ　せられる　せらるれ

前の三記號は一階，後の三記號は半階の高さである。

送らる、　研究せられ　枯れる　得らる、　譯せられ



1. 晴れる　馴れる　降られ　止められ

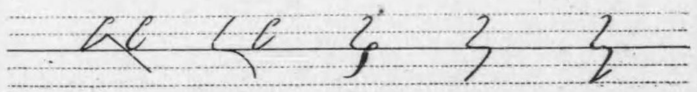
晴る、　馴る、　降られる　止められる

	晴るれ	馴るれ	降らるゝ	止めらるゝ
2.	見られ	取らる	論ぜらる	送られ
	見せられ	取らるゝ	論ぜらるゝ	送らるゝ
	見せらる	取られる	論ぜられ	送られる
	見せらるゝ	取らるれ	論ぜられる	送らるれ
3.	同意せらる	養育せらる	勉强せらる	成功せらる
	同意せられ	養育せらるゝ	勉强せられ	成功せらるゝ
	同意せらるゝ	養育せられ	勉强せられる	成功せられ
	同意せられる	養育せられる	勉强せらるれ	成功せられる

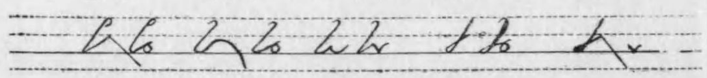
第百四課

前課の續

話され　飲まさる　問はれ　設かれ　設かる



話さるゝ　保たるゝ　たゝかれる　學ばるゝ　學ばれる



上段に掲げたされ,さる,はれ,かれ,かる,は文字

の傍に半階の。點を附けて，表はす事も出來るが，上例の如く書いた方が初學者には便利であらう。下段最後の二語は，略し方の二樣を示したもので，前者はなを省き，後者ははを省いたのである。

練習題中の屆けらる,疑はれる,述べらる,喜ばされる等のけ,は,べ,ば,は連絡上明瞭な時は省いて宜しい。すべて略して差支ないと思ふものは省いてよいけれども，其省き方は如何にするが便利で確實であるかを考えねばならぬ。

1.	言はれ	驚かれ	書かれ	燒かれ
	言はれる	驚かれる	書かる	燒かる
	言はるゝ	驚かるゝ	書かれる	燒かれる
	言はせられる	驚かされる	書かされる	燒かるゝ
2.	待たれ	飲まれ	喜ばれ	及ばれ
	待たる	飲まる	喜ばれる	及ばれる
	待たれる	飲まれる	喜ばるゝ	及ぼされ
	待たるゝ	飲まされる	喜ばるれ	及ぼさるゝ
3.	疑はれ	行はれ	欺かれ	述べられ
	疑はる	行はる	欺かるゝ	述べらるゝ

疑はれる　行はれる　欺かれる　述べらるれ

4. 嫉まる　叫ばれ　届けられ　雇はれ

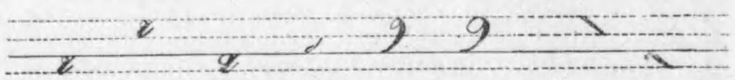
嫉まれる　叫ばるゝ　届けられる　雇はる

嫉まるゝ　叫ばれる　届けらるゝ　雇はれる

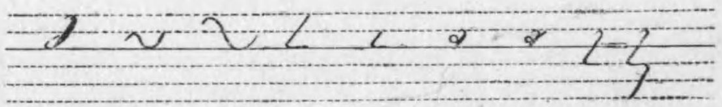
第百五課

其他の略法

です　でした　でせう　めて めた　れば　らば　しき　しく



ばかり　して　した　ので のだ　ならぬ　けれど　けれども　ところ



ますの記號の後に**けれども**が續く時は

……と書く事が出來る。

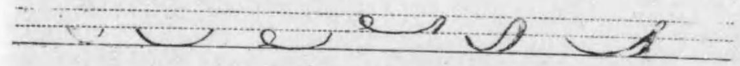
1. 天氣です。地震でした。始て見るのです。
2. 休でせう。雨降らば降れ。毎日練習してゐます。
3. 習字ばかり致します。さうなればよいのです。

4. スラスラ讀めればよい。字をくづしてはならぬ。
5. ペンで書くのだから西洋紙がいゝです。
6. 早く書けたけれども，讀むのに時間がかゝつたから上手に書いたとはいはれないです。
7. 小金井といふ所は櫻の名所です。花は美しく咲きますけれど，直に散るので惜まれます。
8. 法を論じて後，術に進むのが順序です。

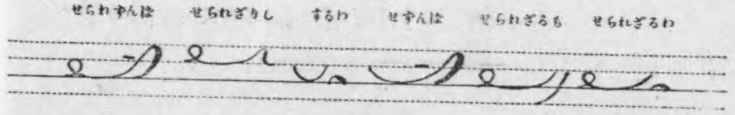
第百六課

する，せずの略法

する　せず　せられず　せられざりき　すれば　せざるわ
すれ　せざる　せられざる



せられずんは　せられざりし　するわ　せずんは　せられざるも　せられざるわ



此省略法は何々するといふ肯定の語と，何何せずといふ否定の語とを省く方法で，其應用は隨分廣いのである。肯定には幅狹き半圓

記號を用ひ，否定には幅廣き半圓記號を用ふる。これが受身となつた時は，前課られらるの記號を附加へ，接續詞がある時は，續けて書いても離して書いても隨意である。さうして此半圓記號の高さは一階で，位置についての條件はない。

1. 進歩する　罰せざれば　訪問せざりき　出勤する
　進歩すれば　罰せざるに　訪問せられざる　出勤せず
　進歩せざるも　罰せずんば　訪問せられずんは　出勤せずんば
2. 同行せられず　後悔する　治療すれば　歡迎せられず
　同行せられざるも　後悔せずば　治療せざるも　歡迎せられずんは
　同行せられざるは　後悔せざるは　治療せざれど　歡迎せられざるは
3. 了解する　約束せざるに　參列せられず　勞働する
　了解せず　約束せざれば　參列せられざるに　勞働せず
　了解せざれば　約束せずんば　參列せざるは　勞働すれば

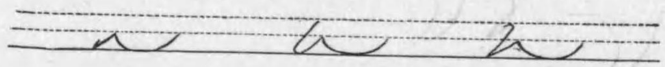
第百七課

する，せず，の應用略法

する，せずの記號は，なる，ならず，からず，あらず等に應用する事が出來る。これ等の語は前

の詞に續く必要上，自然に變化するのであるから決して間違は起らぬのである。例へば公平の次にするの記號を書けば，公平なると讀まれ，せずの記號を書けば公平ならず公平ならざると讀み得られ，又高からず，寒からず，人にあらず，其器にあらず等も同一に扱ひ，尙ほ進んではかゝはらず，とゞまらず等にも用ひられるのである。又何々にはならず，何々にはあらずのなとあとの區別をつけるには，記號の前にあとなとを書けばよろしい。

あらず　ならず　からず
あらざる　ならざる　からざる
あらざれ　ならざれ　からざれ



1. 敏捷なる　穩なる　健康なる　客嗇なる
　敏捷ならず　穩ならざるに　健康ならずば　客嗇ならず
　敏捷ならざれば　穩ならず　健康ならずんば　客嗇ならずんば
2. 賢明なる　重からず　强硬ならず　正しからず
　正しからずんば　正しからざれば　馬にあらず　往くにもあらず
　說くにもあらず　美にあらず　不思議ならず　信ずるにあらず

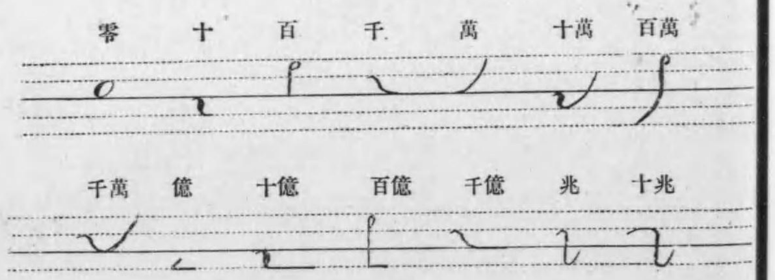
第十五章

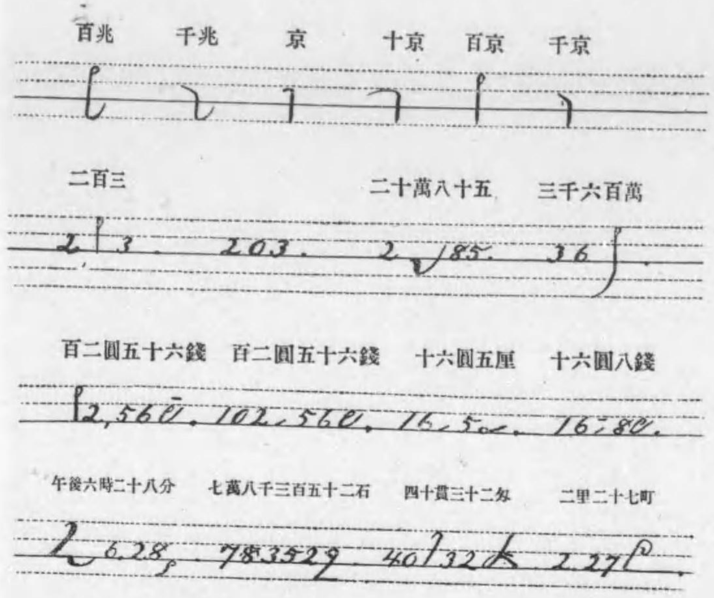
數　字

數字はすべて算用數字を用ひて，書線上に書くのである。其位取は略韻略音の應用であるが，二つの異つた數位を結付けて一字形とする場合は，三階四階の高さとなるが，これは結合上の自然の結果で別にむづかしい事はない。不定數の二十四五は 24_5 又は 24^5 五六十は 5^{60} 又は 5_{60} と記し，一つ二つは $\underline{1}\ \underline{2}$ と書き，二分の一は2/1と記すのである。

第百八課

數位の書方





第十六章

自由略法

我法の主要なる略韻略音兩法の課程を了つたから，最後の自由略法を説明しやう。

二音語略音法は母韻を變形して，或音を省くのであるから，其略された音は有形であるのに反し，自由略法は全く無形とするのである。如何にして無形で略し得るかといふに，言語文章には順序と聯絡があつて，一糸も紊れない前後の關係を利用するのである。併し筆者の環境と見聞の廣狹とによつて，略し得る言語の種類に相違の生ずるは無論で，各人の自由に任すといふ所から，自由略法と名づけたのである。故に本章では一般の規定を示すに止め，其應用の多少は筆者の手腕に待つ事とする。

か行及び三音以上の略音法の中，無形に省いてあるのが，卽ち自由略法である。これは一語の連續上から判定し得る中間又は終の音を略したものであるが，これだけでは不十分であるから，廣く三段略法を應用するの道を開かねばならぬ。

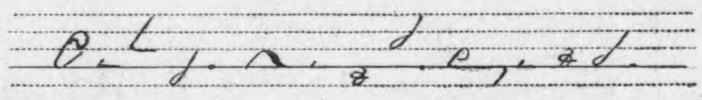
自由略法では此三段法を自在に應用して，い段の諸音いしちにひみりと其拗音とは上段

で，えあ兩段の諸音えせてねへめれ，あさたなはまやらわと其拗音とは中段で，うお兩段の諸音うすつぬふむゆるおそとのほもよろと其拗音とは下段で省き，卽ちか行略音法の書方を成熟音全部に及ぼすのである。始の方の音のみを記すのを甲法と名づけ，一語の全部を省くのを乙法と名づけておかう。

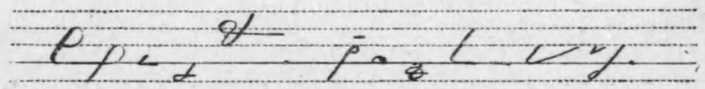
第百九課

自由略法

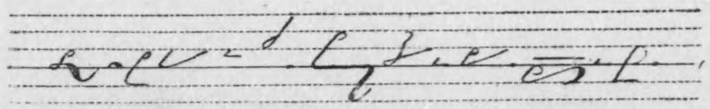
茶を飲みます　演説を續けました　終結を告げませぬ



條約を結びましたらう　本は机の上にあります



筆は其處に置きました　相談會を開く　新聞を讀む



以上は甲法の例であるが，最後の二例のや

うに，開く,讀むと終止した時は，殊に句點を打つておく方が，反讀を容易にする便利がある。

前後の關係より確實に推定し得るものは，全く省いて差支ない。下例中括弧內の語は省略し得られるのを示したのである。

1. 寒くなると氷が(張り)ます。山に(登り)ます。
2. 火花を散らして(戰ひ)ます。車に(乘り)ました。
3. 意見を(述べ)られました。　朝早く(起き)ます。
4. 郵便は確に(着き)ました。　忠義を(盡し)ます。
5. 借金は昨日(返し)ました。　雷が(鳴り)ます。
6. 代價は未だ(拂ひ)ませぬ。　雨が(降り)ます。
7. 緣談は(纏り)ませぬでした。清聽を(煩し)ます。
8. 今夜討論會を(開き)ます。　痛痒を(感じ)ませぬ。

以上は乙法であるが，次に示す如く同じやうな意味を種々に言ひ表はし得るものは，せひとも甲法によらねばならぬ。

私は{話しました / 言ひました / 申しました}　花見に{參りませう / 行きませう / でかけませう}

天氣は{上りさうです / 晴れさうです}　速記術は{存じませぬ / 知りませぬ}

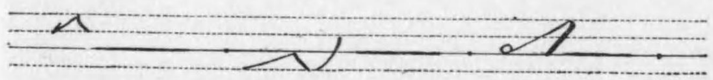
新聞を{讀みました / 見ました}　犬は雪の中を{走り廻ります / 駈け廻ります}

第百拾課

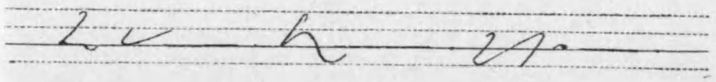
自由略法の續

已知の熟語成文等で明瞭なものは，最初の一二音を記し，書線上に一線をひいて，後は略して差支へない。

豈圖らんや。　犬も歩けば棒にあたる。　利害得失。



因之觀之。　果して然らば　大功は細瑾を顧みず。



家貧うして(孝子出づ)　本立つて(道生ず)

精神一到(何事か成らざらむ)狡兎死して(走狗煮らる)

虎穴に(入らずんば虎子を得ず)前車の(覆るは後者の戒)

月落ち(烏啼いて霜天に滿つ)年寄の(冷水)

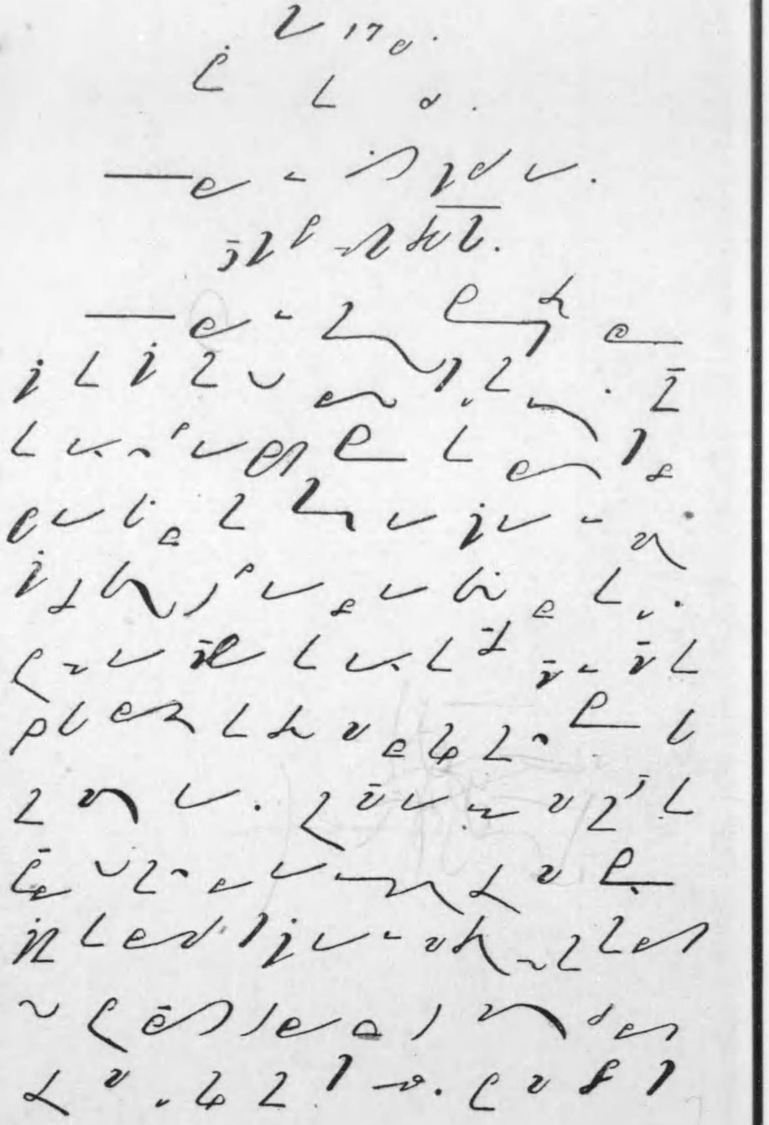
羊頭を(懸けて狗肉を賣る)　藝は(身を助ける)

古池や(蛙飛込む水の音)　三人寄れば(文珠の智慧)

朝顏に(釣瓶とられて貰ひ水)人は死して(名を留む)

地名人名共に略韻略音兩法により，其明瞭なるものは自由略法を用ひ，人名の下には・地名の下には、符をつけて目標とし，語句の要所又は記憶を要する語の下には，一横線を引いて置くと，複文の時非常に便利であるから，臨機これを用ふるがよろしい。

速　記　の　例



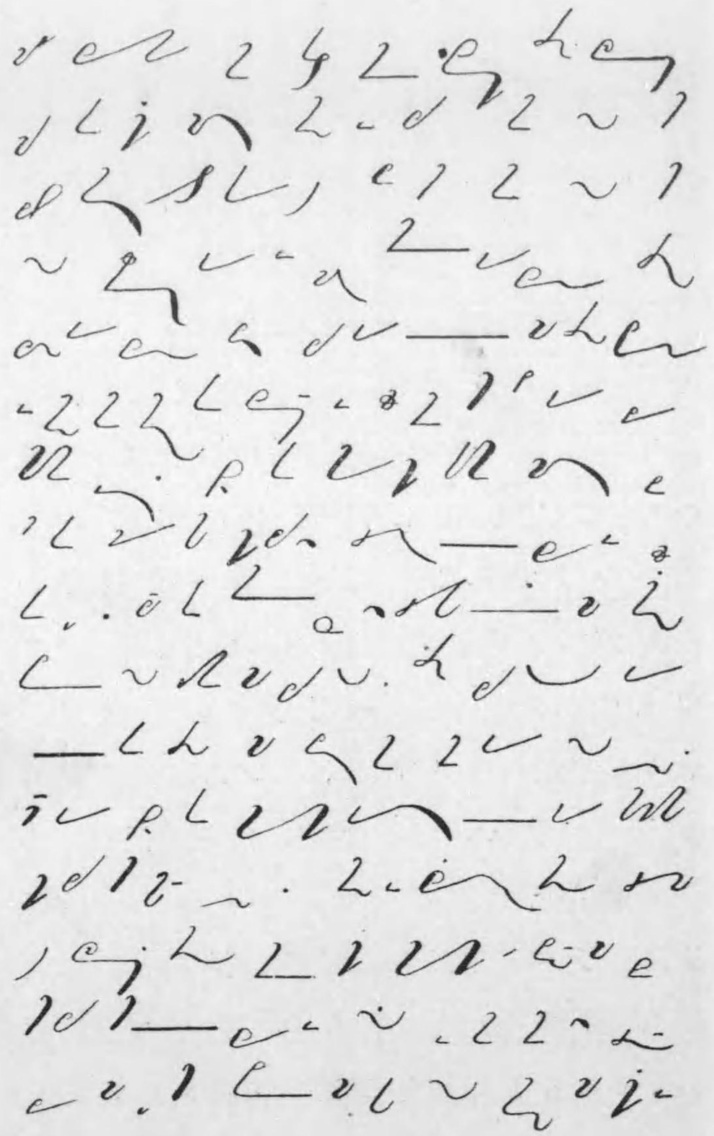
第十七節

速記の例

速記術を一般學生に

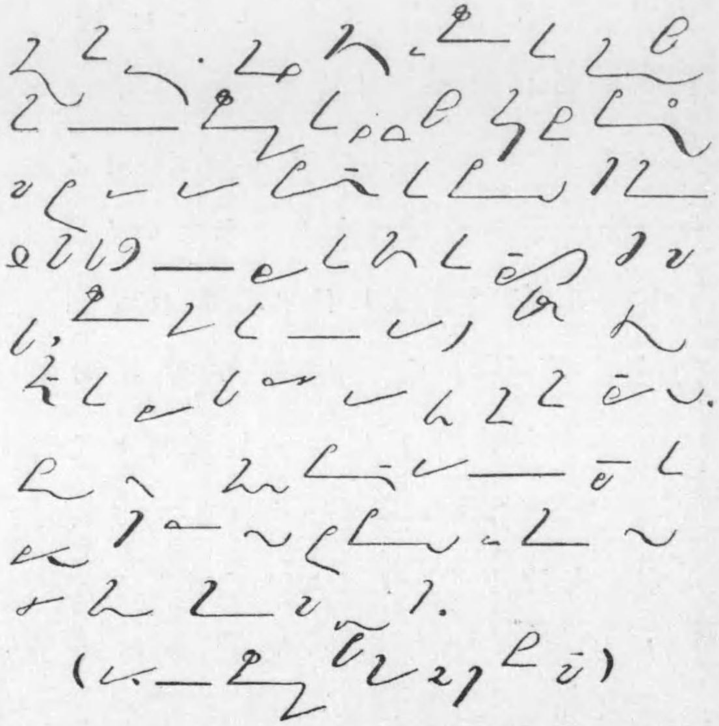
文學博士上田萬年談

速記術を高等小學若くば中等學校の學科とする必要があると思ふ. 今後の日本は非常に社交上の事務が複雜になつて行くと同時に學校に於ての學科目なども非常に複雜になつて行くのである. 其上に現在の日本の文字言語を現在のやうな仕組のまゝで行くといふ事は容易な事ではない. 此點に於て國民の損失する所は非常に大きなもので歐羅巴各國の子弟が學校に於て學び得る所と比較して其進歩も實力も極めて低いものであるといふ事が云へる. ソコデ私が



提案したいといふのは高等小學若くば中學程度の學校では之を正科として課せよとは云はないけれども隨意科として課して教場に於ての講義にしろ又説明にしろ總て生徒に速記で以て材料を取るといふことの習慣をつけることが非常に必要だと思ふ. 歐羅巴の大學などでは少し氣の利いた學生は皆速記術を使ふのである. 先生の講義録は皆速記で取つてさうして後で清書する. 若くば清書せずに速記のまゝですますといふ事にして居る. 現に歐羅巴の大學には速記に長けた學生が澤山居る. 之を實際から見ても中學校から高等學校大學へ進んで行く學生が速記術を知つて居ると云ふ事は無論必要であるがさうでなくして途中で學校を

廢して社會各般の事業に從事する子弟に取つても非常に便利なことであつて會社に入つても又役所に勤めても速記の出來る人と出來ない人とは役に立ち方が非常に違ふ．それであるから此速記術も一度習つて置けば一生涯その人の武器になり利器になるのであつて決して學んで損のない事である．さう云ふことは高等小學でなくても或は補習教育として授けてもよい又各種の專門學校などの生徒に夜業の仕事として教へてもよいのである．專門家になるのは別問題として專門家にならずとも速記術を知つて居るといふことは社會の凡ゆる方面に非常な其人の利益になる．卽ち速記の一般普及といふことは最も必要の



こと丶思ふ. 斯ふいふ側を教育の當路者と速記協會の有力者とが能く相談されて其間に最善の方法が講せられたならば速記術の爲の進歩ばかりでなく. 教育界の進歩にもなるし又個人の非常な利益になる事と信ずる. 宜しく斯る方面に速記專門の人々が留意して其方法を講じて見たらどうであらうか

(日本速記協會雜誌第二號ヨリ轉載)

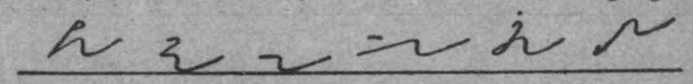
露光量違いの為重複撮影

一部の改良

略音法中ちゃ行とつぁ行との書方を,下の如く改める。

第六十二課た行上段の略法

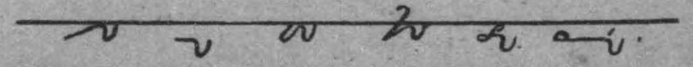
蜂　口　内　インチ　パッチ　あーち



筆尾の上行線を,母韻のいと同じ開きに書く。

第六十三課た行下段の略法

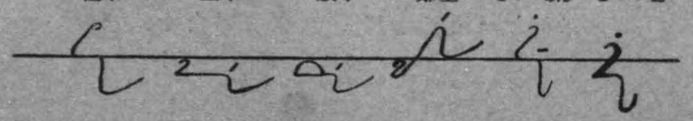
何時　打　熱　且　佛　流通



直立體を用ひ,筆尾の上行線を母韻のえと同じ開きに書く。

第六十四課た行拗音の略法

粗茶　空中　旅中　鄭重　とっつぁん　ごっつぉー



ちゃちゅちょの筆尾は,第六十二課と同じ開きに,つぁつぉの筆尾は第六十三課と同じ開きに書く。

因て八十六課才智のち八十七課のいのち,明にち八十八課のぶつ議九十課のあながち,すなわち九十四課のいきうつし九十五課のちからもちを書改めねばならぬ。

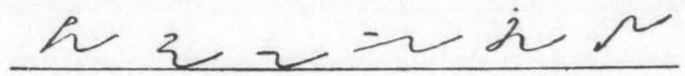
露光量違いの為重複撮影

一部の改良

略音法中ちゃ行とつぁ行との書方を,下の如く改める。

第六十二課た行上段の略法

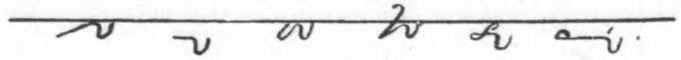
蜂　日　内　インチ　パッチ　あーち



筆尾の上行線を,母韻のいと同じ開きに書く。

第六十三課た行下段の略法

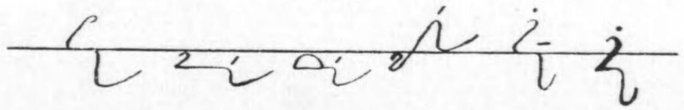
何時　打　熱　且　佛　流通



直立體を用ひ,筆尾の上行線を母韻のえと同じ開きに書く。

第六十四課た行拗音の略法

粗茶　空中　旅中　鄭重　とっつぁん　ごっつぉー



ちゃちゅちょの筆尾は,第六十二課と同じ開きに,つぁつぉの筆尾は第六十三課と同じ開きに書く。

因て八十六課才智のち八十七課のいのち,明にち八十八課のぶつ議九十課のあながち,すなわち九十四課のいきうつし九十五課のちからもちを書改めねばならぬ。

露光量違いの為重複撮影

正　誤

二十二頁ちゅとしてちを記したるは誤り四十四頁兎のう,疑のうは書線に書き四十九頁計略の略はなほ一階高く記し七十頁薄荷のは喧嘩のけ關係のか版權のはには母韻をつけた方がよろしい。

修　訂

日本速記法

毛利高範著

本書は日本速記術の理論を講述したもので術の原則を明にせんとする者は必ず本書を一讀せねばならぬ

正價金一圓五十錢　書留送料金十八錢

速記練習帖

正價金二十五錢　二冊マデ郵税四錢

發賣所　神田區表神保町　振替東京二七〇番　株式會社東京堂

速記術教授開始

規則書郵券二錢を要す

東京市外淀橋町柏木九三一

毛利式速記研究所

大正十一年八月五日印刷
大正十一年八月八日出版

著作權所有

著者兼發行者　毛利高範
東京府豐多摩郡淀橋町柏木九百三十一番地

印刷者　大久保秀次郎
東京府荏原郡世田谷村字下町五十番地

印刷所　株式會社東京築地活版製造所
東京市京橋區築地二丁目十七番地

發行所　毛利式速記研究所
東京府豐多摩郡淀橋町柏木九百三十一番地

發賣所　株式會社東京堂
東京市神田區表神保町三番地
振替口座東京二七〇番

正價金壹圓五拾錢
郵税六錢

露光量違いの為重複撮影

正　誤

二十二頁ちゅとしてちを記したるは誤り四十四頁兎のう疑のうは書線に書き四十九頁計略の略はなほ一階高く記し七十頁薄荷のは喧嘩のけ關係のか版權のはには母韻をつけた方がよろしい。

修　訂

日本速記法

毛利高範著

本書は日本速記術の理論を講述したもので術の原則を明にせんとする者は必ず本書を一讀せねばならぬ

正價金一圓五十錢　書留送料金十八錢

速記練習帖

正價金二十五錢　二册マデ郵税四錢

發賣所　神田區表神保町　振替東京二七〇番　株式會社　東京堂

速記術教授開始

規則書郵券二錢を要す

東京市外淀橋町柏木九三一

毛利式速記研究所

大正十一年八月五日印刷
大正十一年八月八日出版

著作權所有

著者兼發行者　毛利高範
東京府豐多摩郡淀橋町柏木九百三十一番地

印刷者　大久保秀次郎
東京府荏原郡世田谷村字下町五十番地

印刷所　株式會社東京築地活版製造所
東京市京橋區築地二丁目十七番地

發行所　毛利式速記研究所
東京府豐多摩郡淀橋町柏木九百三十一番地

發賣所　株式會社東京堂
東京市神田區表神保町三番地
振替口座東京二七〇番

正價金壹圓五拾錢
郵税六錢

323
435

終